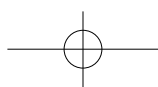
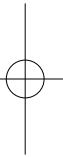
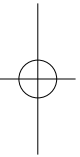


# 貴生川遺跡第4次発掘調査報告書

2018

甲賀市教育委員会



# 序

甲賀市は滋賀県の南東部に位置しており、県内でも3番目の面積を有します。この広い市域には、多数の文化財が残されており、「紫香楽宮跡」・「垂水斎王頓宮跡」・「甲賀郡中惣遺跡群」・「水口岡山城跡」という4つの国指定史跡があるほか、多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されています。

埋蔵文化財は地中に埋もれていることから、普段目にする機会が少なく、発掘調査によって初めて明らかになります。この地中に残された文化財は、先人たちが築いてきた歴史であり、今の甲賀市へと繋がる郷土の大切な財産です。この財産を開発から保護し、時には記録することで後世へと伝えていくことが文化財行政の大きな責務です。

本報告書で取り上げる「貴生川遺跡」ではこれまでの発掘調査によって、戦国時代の単郭方形城館が見つかり、今回の発掘調査でも、鎌倉時代から室町時代にかけての方形居館が明らかとなり、中世甲賀の歴史を知る上で貴重な成果が上がっています。

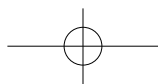
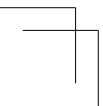
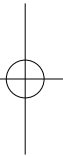
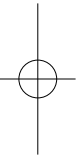
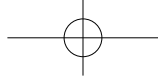
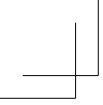
本報告書に掲載する調査成果が本市の歴史を解明する一助となり、市民の皆様をはじめ、多くの方に知っていただき、広く活用されることを切に願っています。

最後になりましたが、本調査の実施に多大なご協力をいただきました貴生川西内貴土地区画整理組合及び調査関係者に厚く御礼申し上げます。

平成30年（2018年）3月

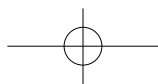
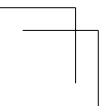
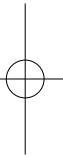
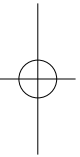
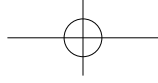
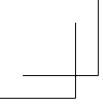
甲賀市教育委員会

教育長 山下 由行



## 例 言

1. 本書は甲賀市教育委員会が平成 29 年度に実施した貴生川遺跡第 4 次発掘調査の報告書である。
2. 調査原因は貴生川西内貴土地区画整理組合による宅地造成事業である。
3. 甲賀市教育委員会における調査体制は以下の通りである。  
調査主体 甲賀市教育委員会教育長 山下 由行  
調査事務局 甲賀市教育委員会事務局 歴史文化財課  
課長 長峰 透  
課長補佐兼埋蔵文化財係長 鈴木良章  
埋蔵文化財係 主査 小谷徳彦  
主査 渡部圭一郎  
技師 伊藤航貴(調査担当)  
嘱託 河村萬里
4. 現地調査および整理調査にあたり、下記の方々の協力を得た(敬称略・五十音順)  
市田まち子 今村昌生 小川悦男 治武慮二 辻清司 筒井和夫 寺田昌裕 富原由男  
仲川忠明 中島李夏 西尾均 平井正義 平本瞳 広岡輝治 藤本安弘 村田了 守武弘太郎
5. 本書の執筆・編集は伊藤が行った。また、本書に掲載した図面の作成は伊藤が担当し、中島李夏、守武弘太郎が作業にあたった。
6. 本書で使用した水準高は東京湾平均海面高度を基準とし、座標については、世界測地系に準拠する。なお本書で用いる北は座標北である。
7. 本書で使用する遺構略号は次の通りである。  
SD：溝 SK：土抗 SP：ピット SX：その他不明遺構
8. 本書で報告した発掘調査で出土した遺物や図面・写真類については、甲賀市教育委員会が保管している。



# 目 次

第1章 周辺環境	1
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第3節 これまでの貴生川遺跡の発掘調査成果について	
第2章 調査に至る経緯と経過	5
第1節 調査経緯と経過	
第2節 現地調査日誌抄	
第3章 発掘調査	8
第1節 調査の方法	
第2節 基本層序	
第3節 遺構	
第4節 遺物	
第4章 まとめ	26
第1節 方形居館について	
第2節 中世における貴生川遺跡の変遷	
第3節 まとめ	

# 挿 図

第 1 図 甲賀市位置図	第 13 図 出土遺物実測図③
第 2 図 周辺の遺跡分布図	第 14 図 出土遺物実測図④
第 3 図 調査地位置図	第 15 図 出土遺物実測図⑤
第 4 図 調査区位置図	第 16 図 出土遺物実測図⑥
第 5 図 北壁土層断面図	第 17 図 出土遺物実測図⑦
第 6 図 東壁土層断面図	第 18 図 出土遺物実測図⑧
第 7 図 遺構平面図	第 19 図 前回調査時の平面図との合成図
第 8 図 調査区東側平面図	第 20 図 遺構変遷図
第 9 図 SD007 土層断面図	第 21 図 遺構変遷図（第 1 段階）
第 10 図 SD026 土層断面図	第 22 図 遺構変遷図（第 2 段階）
第 11 図 出土遺物実測図①	第 23 図 遺構変遷図（第 3 段階）
第 12 図 出土遺物実測図②	

## 写真図版

- |      |                       |       |                     |
|------|-----------------------|-------|---------------------|
| 図版 1 | 調査区全景（西から）・（東から）      | 図版 8  | SP052 遺物出土状況・ピット内柱根 |
| 図版 2 | 調査区西・東側               | 図版 9  | 出土遺物①               |
| 図版 3 | SD007 掘削状況・堆積状況       | 図版 10 | 出土遺物②               |
| 図版 4 | SD026 掘削状況・堆積状況       | 図版 11 | 出土遺物③               |
| 図版 5 | SD089 完掘状況・堆積状況       | 図版 12 | 出土遺物④               |
| 図版 6 | SD089 北壁断面・SD007 南壁断面 | 図版 13 | 出土遺物⑤               |
| 図版 7 | SD082・SP084 遺物出土状況    | 図版 14 | 出土遺物⑥               |



## 第1章 周辺環境

### 第1節 地理的環境

貴生川遺跡が所在する甲賀市は滋賀県の南東部に位置し、東から南にかけては三重県、西は京都府と接している。東西に長い甲賀市の面積は481.69km<sup>2</sup>であり、高島市、長浜市に次いで県内3番目の広さである。市域を国道1号や新名神高速道路といった主要道が東西に貫いており、関西圏と中部圏をつなぐ地点に甲賀市は位置している。

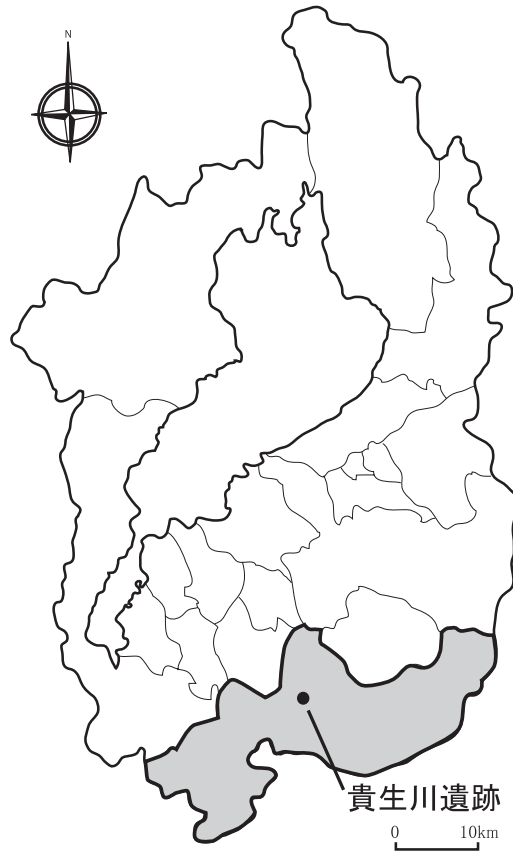
市域の東には標高1,000 m級の鈴鹿山脈、南には標高500～700 mの信楽山地があり、これらに挟まれた地域に標高200～300 mの水口丘陵、甲賀丘陵、甲南丘陵の3つの丘陵が広がっている。これらの丘陵は古琵琶湖重粘土層で形成されているため、小河川による長年の浸食によって、樹枝状に複雑な開析谷が入り込んでいる。この地形は甲賀の歴史に大きな影響を与えており、この地に住む人々の生活にも密接に関連している。

市内には鈴鹿山系を源流とする野洲川と杣川が東から西へと流れている。野洲川は土山町と水口町を流れ、杣川は甲賀町から甲南町、水口町を流れ、甲賀市と湖南市の市境近くの水口町泉付近で合流し、琵琶湖へと流れている。

貴生川遺跡は甲賀市水口町貴生川に所在する。水口地域は、市域の中・北部を占め、東は土山、南は甲賀・甲南・信楽の甲賀市の各地域と接し、西は湖南市、北は東近江市と蒲生郡竜王町および同郡日野町に接する。貴生川遺跡は水口地域の南部に流れる杣川右岸の河岸段丘上に位置しており、遺跡の南側は杣川の氾濫原となる。貴生川遺跡は発掘調査が行われる前には田畑が広がる地域であったが、近年は宅地化が著しく、景観が大きく変化している。

### 第2節 歴史的環境

貴生川遺跡は、古墳時代から安土桃山時代にかけての遺跡である。これまでの発掘調査によって、古墳時代中期の竪穴建物、平安時代末から鎌倉時代にかけての掘立柱建物・柵・溝・土坑等、安土桃山時代の城館が見つかっている。ここでは杣川流域に分布する遺跡を中心に貴生川遺跡周辺の歴史的環境を述べていく。

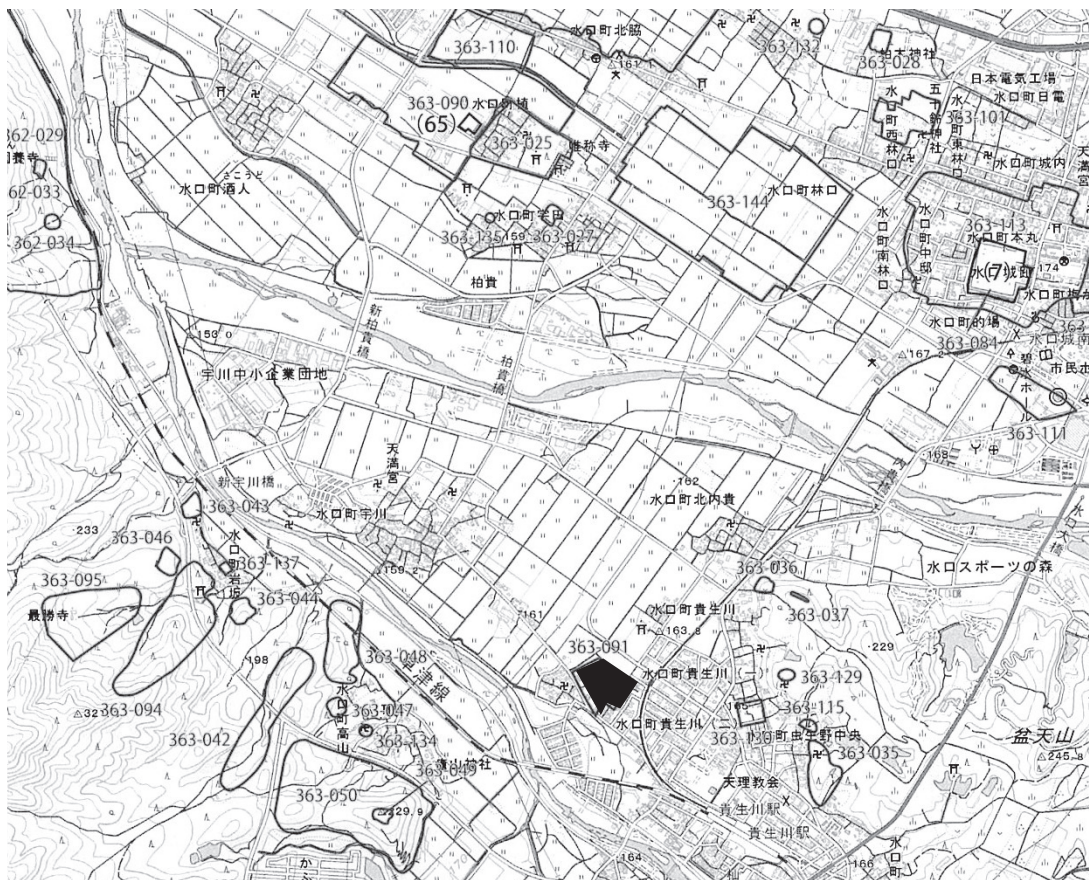


第1図：甲賀市位置図

杣川流域の縄文時代の遺跡は、油日縄文遺跡、寺山遺跡、矢川寺遺跡が挙げられる。油日縄文遺跡は、油日岳の山麓に位置する市内で最も古い、縄文時代早期の集落遺跡である。縄文早期の押型文土器や貯蔵穴などの遺構が確認されている。遺跡の立地、内容などは鈴鹿山系の山麓に点在する遺跡と類似しており、その関連性が想定されている。

甲南町新治に位置する寺山遺跡では、縄文時代早期から中期にかけての土器が出土しており、石器も一定量出土している。また、矢川寺遺跡は甲南町森尻の北東、杣川右岸の河岸段丘上に位置する縄文時代から江戸時代にわたる遺跡である。発掘調査では、縄文時代の遺物として石鏃や磨石、敲石、剥片が見つまっている。剥片が出土していることから、この周辺で石器を製作し、生活していたことが推定される。

甲賀市域では弥生時代の遺跡や遺物は県内の他の地域と比べると少ない。弥生時代になると、野洲川下流域の沖積地や扇状地に弥生人の生活拠点は移り、甲賀市ではその時代の活動は少ないと考えられてきた。しかし、貴生川遺跡の発掘調査で、弥生時代中期の



第2図：周辺の遺跡分布図

- 362-033 園養寺遺跡 362-034 三雲寺遺跡 363-049 高山氏城遺跡 363-025 植城遺跡 363-027 山中氏屋敷遺跡  
 363-028 柏木神社遺跡 363-035 北虫生野城遺跡 363-036 内貴川田山城遺跡 363-037 川田山古墳群  
 363-042 百合野古墳群 363-043 岩坂古墳群 363-044 源太屋敷城遺跡 363-046 平子城遺跡  
 363-047 高山屋敷跡 363-048 御姫屋敷城遺跡 363-050 高山古墳群 363-084 水口城跡 363-090 植遺跡  
 363-091 貴生川遺跡 363-094 岩坂南古墳群 363-095 最勝寺境内遺跡 363-101 西林口遺跡  
 363-110 花池遺跡 363-113 水口城遺跡 363-115 落シ谷遺跡 363-129 内貴尾山城遺跡 363-130 内貴殿屋敷遺跡  
 363-132 里北脇遺跡 131-134 山上館遺跡 363-135 西出館遺跡 363-137 岩坂屋敷遺跡 363-144 柏木遺跡  
 ※遺跡番号は滋賀県教育委員会編(2016)『滋賀県遺跡地図』より

土器がまとまって出土し、貴生川遺跡周辺での弥生時代の集落跡が見つかる可能性が高まった。杣川流域ではないが、鈴鹿山脈の山中にある、山女原遺跡や鈴鹿峠遺跡といった遺跡から、ごく少量であるが、弥生時代初頭から古墳時代の遺物が見つかっている。古墳時代に入ると、野洲川流域において植遺跡のような大規模な遺跡が認められるが、杣川流域では竹石遺跡や大鳥居遺跡などが挙げられる。竹石遺跡は水口町三大寺の杣川左岸の中位段丘に位置している。遺構は古墳時代後期と鎌倉から室町時代にかけての2つの時期が確認されている。竹石遺跡の西側にそびえる飯道山の山麓部には、古墳時代後期に築造された甲賀群集墳が存在し、竹石遺跡の年代と重なることからこの群集墳と竹石遺跡の集落との関係が注目されている。

大鳥居遺跡は甲南町池田の杣川沿いの平野部に位置している。集落の痕跡は発見されなかったが、古墳時代後期に使用されていたと考えられる溝跡が見つかっている。この溝は灌漑用水路として開削されたとみられ、杣川流域の古墳時代の治水や集落経営を知る手がかりとなる遺跡である。

杣川流域の遺跡は、古墳時代までの遺跡数は少ないが、中世に入るとその数は増大する。その中でも注目すべきものはやはり城館だろう。市域には約180もの中世城館が確認されている。その多くが「単郭方形」タイプという共通した形態で、城の規模も半町四方の同規模である。これまで甲賀市の城館を発掘した例は、水口町の植城遺跡や甲南町の竜法師城、甲賀町の補陀楽寺城、青木城、上野城、高野城などが挙げられ、築城時期は概ね16世紀後半頃と推定されている。この城館の築城年代に甲賀郡を運営していたのは甲賀郡中惣である。甲賀郡中惣とは、同じ血縁関係のあるものが同名中として組織され、さらに同名中同士が結束してできた広域の自治組織である。

中世の甲賀は城館だけでなく、多数の集落遺跡が試掘調査や分布調査によって発見されている。文殊院遺跡、貴生川遺跡、竹石遺跡、沢ノ尻遺跡などが挙げられる。特に文殊院遺跡では瓦器がまとまって出土している。この遺跡は、甲南町池田の杣川左岸の河岸段丘上に位置し、過去の発掘調査では、瓦器を中心に多くの中世土器が出土した。ここで出土した瓦器は、近江において生産された「近江型瓦器」と呼ばれるものとは一概には言えず、大和型や伊賀型の影響を受けていると考えられるものが多い。遺跡が位置する甲南町池田は、「檜尾神社文書」によれば、「近江国甲賀上郡興福寺御領池田之保」とあり、当地域と大和との間には深いつながりがあったと考えることができる。この文殊院遺跡出土の瓦器は、中世の杣川流域の姿を考える上で重要なものである。

甲賀郡中惣による支配は、天正13(1585)年の豊臣秀吉による甲賀衆の改易処分、いわゆる「甲賀ゆれ」によって終焉を迎え、郡中惣は解体された。甲賀郡中惣に代わって甲賀郡を支配したのは、豊臣政権である。地域支配の拠点として秀吉の命により、中村一氏が水口岡山城を築城した。水口岡山城は中村一氏、増田長盛、長束正家の3人が城主となったが、慶長5(1600)年の関ヶ原の戦いの後、廃城となる。慶長6年には近世東海道の宿駅に指定され、水口は徳川政権の直轄支配となり、3代将軍家光の上洛に伴い水口城が築かれた。その後、天保2(1682)年に水口藩が置かれ、江戸時代を通して宿駅と城下町と

して整備されていく。

### 第3節 これまでの貴生川遺跡の発掘調査成果について

これまで貴生川遺跡では平成25・26年度に発掘調査が実施された。今回の第4次の発掘調査区が平成26年度の調査区に隣接しており、今回の調査成果の理解を深めるためにも、これまでの調査成果をここで簡潔にまとめておく。詳細な調査成果については、平成29年に刊行した甲賀市文化財調査報告書第29集『貴生川遺跡発掘調査報告書』を参照されたい。

平成25・26年度の貴生川遺跡発掘調査では、古墳時代と平安時代から鎌倉時代にかけての集落跡、室町時代から安土桃山時代にかけての城館が確認されている。

遺構の変遷はI期からIV期に区分されている。第I期は弥生時代中期である。この時期の明確な遺構は確認されていないが、落ち込みや土坑、ピットから弥生時代中期の土器が出土している。

第II期は古墳時代中期である。竪穴建物が4棟検出されている。この竪穴建物から5世紀後半の土器が出土し、この時期は、西鐘子塚古墳や東鐘子塚古墳、泉塚越古墳が築造された時期にあたる。

第III期は、平安時代から鎌倉時代である。この段階の遺構が、最も多く検出されている。第III期の中でも4段階に区分されている。11世紀後半から12世紀前半のi段階では、遺構自体がほとんどない。12世紀後半のii段階では、建物と土坑(墓)の組み合わせが確認でき、建物の主軸は地点によって大きく異なる。この段階では、区画溝は検出されていない。13世紀前半のiii段階になると庇付きの建物が2棟確認できる。建物の主軸がまとまりはじめ、この段階になると、建物に付属する溝が見られるようになる。13世紀前葉から中葉のiv段階では、2つの溝と土塁状の構造物で囲まれた屋敷地が出現する時期である。屋敷地内には建物跡のほかに井戸も検出され、屋敷地外にも建物が確認できる。建替えも確認でき、屋敷地内では建物の柱穴から炭が多く検出されていることから火災などの可能性があったと考えられている。

第IV期は室町時代後期から江戸時代である。深い堀と土塁に囲まれた単郭方形城館がこの段階の遺構である。出土遺物の年代からこの城館の機能した時期は16世紀後半から17世紀前半であるとみられる。築城・改修の契機が、織田信長の近江侵攻、廃城は豊臣秀吉による「甲賀ゆれ」によって甲賀郡の支配体制が大きく変わったと考えられている。

## 第2章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査経緯と経過

今回の発掘調査は、貴生川西内貴土地区画整理組合による貴生川遺跡内の宅地造成工事に伴い、甲賀市教育委員会を調査主体とし、現地調査を平成29年5月12日から平成29年8月30日にかけて実施した。調査面積は741㎡。整理調査を現地調査終了後から平成30年3月31日にかけて実施した。また、平成29年8月9日に記者発表を行い、平成29年8月19日に現地説明会を開催した。現地説明会には約100人の参加者があった。

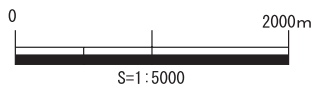
### 第2節 現地調査日誌抄

- |       |  |      |  |
|-------|--|------|--|
| 5月12日 | 重機掘削を開始する。調査区北側の排水溝を掘削する。                          | 5日   | 調査区南側を精査する。                              |
| 13日   | 排水溝の掘削が終了し、調査区西側から精査を開始する。                         | 6日   | SD005を掘削する。                              |
| 16日   | 調査区北西側の精査、東側の排水溝を掘削する。                             | 8日   | 排水作業を行う。                                 |
| 17日   | 調査区北西側の精査、遺構概略図作成のための地区割りを行う。                      | 9日   | 調査区東側の精査を行う。方形居館内側の溝(SD026)を検出する。        |
| 18日   | 調査区北西側を精査する。                                       | 12日  | 調査区東側の精査を行う。方形居館外側の溝(SD007東西方向)を検出する。    |
| 19日   | 調査区南西側の精査、南側の排水溝を掘削する。                             | 13日  | SD007にサブトレを設定し、掘削する。                     |
| 22日   | 調査区南西側の精査を行う。SK001・002を検出する。                       | 14日  | SD007サブトレを掘削し、土層断面を確認する。                 |
| 23日   | 調査区北側、南側の精査、SK001・002を写真撮影の後、掘削する。方形居館南側の溝を一部検出する。 | 15日  | SD005を完掘、SD007南北方向を検出する。                 |
| 26日   | 排水作業を行う。   | 16日  | SD007の南東隅部は攪乱のため検出できず。SD007東西の土層断面を実測する。 |
| 29日   | 調査区中央部の精査、検出したピットを掘削する。                            | 19日  | SD007の南北方向にサブトレを設定し、掘削する。                |
| 30日   | 調査区中央部北側および北壁を精査する。                                | 20日  | SD007サブトレを掘削し、土層断面を実測する。                 |
| 31日   | 調査区中央部北側で検出したピットを掘削する。                             | 23日  | SD007を掘削する。                              |
| 6月1日  | 調査区南側の精査、調査区北側で検出した溝を掘削する。                         | 27日  | SD007を完掘し、写真撮影を行う。                       |
|       |  | 29日  | ピットSD026のサブトレを掘削する。                      |
|       |  | 7月3日 | ピットを掘削する。SP052・056                       |

- において瓦器片や土師器皿、青磁椀が出土。また、埋土には炭が多く含まれた。
- 6日 調査区南側において精査を行ったが、方形居館内側の溝は、南側で検出できず。
- 7日 SD026 のサブトレを完掘し、土層断面を実測する。
- 10日 SD026 を掘削する。
- 11日 SK081・SD026 を掘削する。
- 12日 SD007 東西方向を掘削する。
- 13日 SD007を掘削する。下層から15世紀後半頃とみられる信楽焼の甕が出土した。
- 14日 SD007・082・SK083を掘削する。SD007 東西方向の西側は調査区外へと延びる。
- 19日 SK081・SD082・SK083を掘削する。
- 20日 SD007 を掘削する。
- 24日 SD007・082・SK083を掘削する。
- 25日 SD007 を完掘する。
- 26日 調査区西側を精査する。
- 27日 調査区西側を精査する。  
SD089・091を検出する(方形居館西側の内外の溝を検出)。
- 28日 SD089を掘削するが、遺物の出土なし。
- 8月1日 SD091 を掘削する。
- 2日 方形居館の内側の溝が南側で検出できないことから、サブトレを設定して確認する。
- 3日 SD026とSD091は繋がらないことがわかり、SD026はSK092に接続することを確認する。
- 4日 SD091、SK092 を掘削する。  
どちらも15～16世紀の信楽焼が出土する。
- 9日 記者発表(溝に囲まれた鎌倉～室町時代にかけての方形居館を発見)
- 10日 調査区の全景写真を撮影する。
- 21日 遺構平面図を作成する。
- 22日 遺構平面図を作成する。レベル測定を行う。
- 24日 SK083 を掘削する。
- 25日 調査区壁面精査、写真撮影を行う。
- 28日 調査区壁面の土層断面図を作成する。
- 29日 現場撤収作業。
- 30日 現場完全撤収。



第3図：調査地位置図



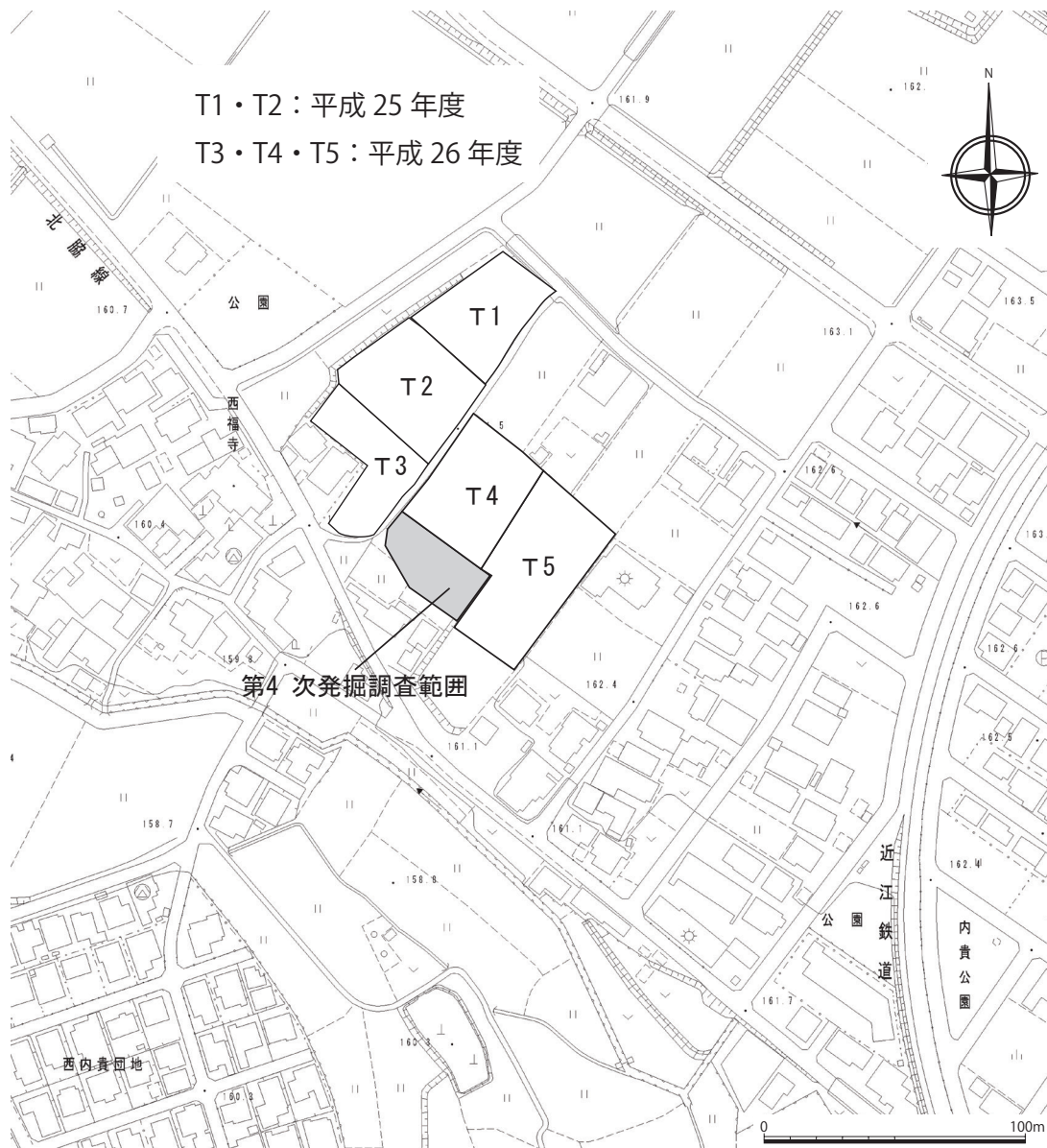
### 第3章 発掘調査

#### 第1節 調査の方法

調査対象範囲は、宅地造成工事が行われる全域としたが、周囲は宅地化が進んでおり、調査区内への立ち入りを防ぐフェンスを設置したため、調査実施範囲は開発面積よりもやや狭いものとなった。

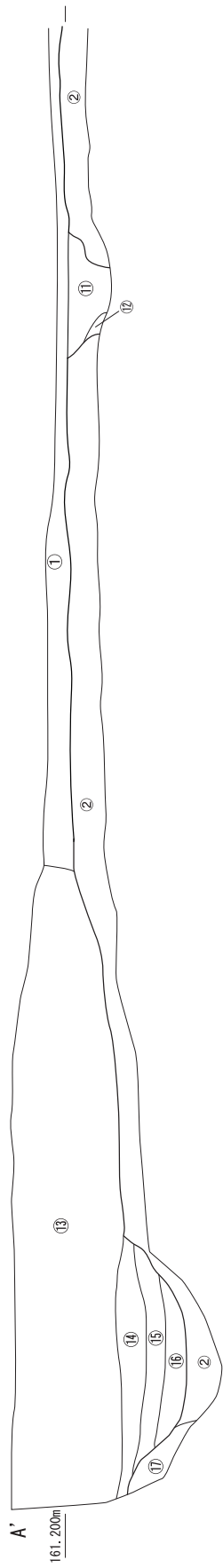
今回の調査区は、前回の調査区T4の南西側に位置し、面積は748㎡である。調査地は畑地であった。

これまでの発掘調査で、T4およびT5で二つの溝と土塁状の構造物で囲まれた屋敷地が確認されている。そして、その二つの溝はT4の外側、南西方向に延びていることがわかり、今回の調査区内に、おいてこの二つの溝が検出できると推定さ



第4図：調査区位置図





第5図 北壁土層断面図



土層凡例

- ① 灰褐色粘質土 (表土)
- ② 灰褐色粘質土 (地山及び遺構検出面)
- ③ 黄褐色粘質土 (黄褐色ブロック含む)
- ④ 灰褐色粘質土 (礫を多く含む)
- ⑤ 茶褐色粘質土
- ⑥ 黒褐色粘質土
- ⑦ 黒褐色粘質土 (暗灰色ブロック含む)
- ⑧ 黒褐色粘質土 (黄褐色ブロック含む)
- ⑨ 灰褐色粘質土 (地山及び遺構検出面)
- ⑩ 灰褐色粘質土
- ⑪ 黒褐色粘質土
- ⑫ 黒褐色粘質土 (灰褐色ブロック含む)
- ⑬ 現代の造成土
- ⑭ 暗茶褐色粘質土
- ⑮ 茶褐色粘質土 (暗灰色ブロック含む)
- ⑯ 暗灰色粘質土 (黄褐色ブロック含む)
- ⑰ 黄褐色粘質土 (地山及び遺構検出面)
- ⑱ 灰白色粘質土



S=1:40

れた。そのため、今回の調査では溝と土塁状の構造物が四方を囲むのかどうか、明らかにすることを主目的として行った。表土の掘削は重機で掘削し、遺構面の精査は人力で行った。

## 第2節 基本層序

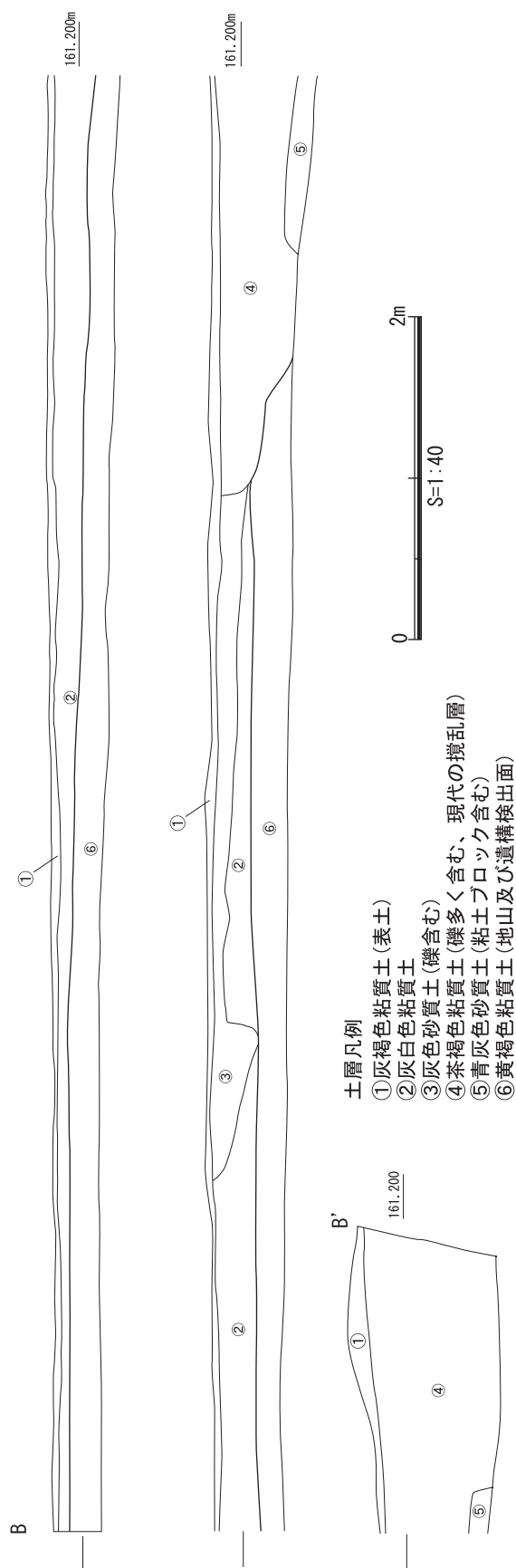
基本層序は、上から①灰褐色粘質土、②黄褐色粘質土(地山及び遺構検出面)である。調査区北東側では表土にも遺物が含まれていた。調査区は北から南の杣川に向けて緩やかに傾斜している。北側では表土直下に遺構面があるが、南に傾斜しながら灰白色粘質土が表土と遺構面の間に堆積していた。遺構検出面の標高は161.100～161.300mである。調査区西側では地山面が西に向かって傾斜しており、約30cm下がった地点でSD 089を検出している。従来の地山面は周辺の地形をみても西に向かって下がることはなく、この落ち込みは後世の造成によって削られたものであると考えられる。

## 第3節 遺構

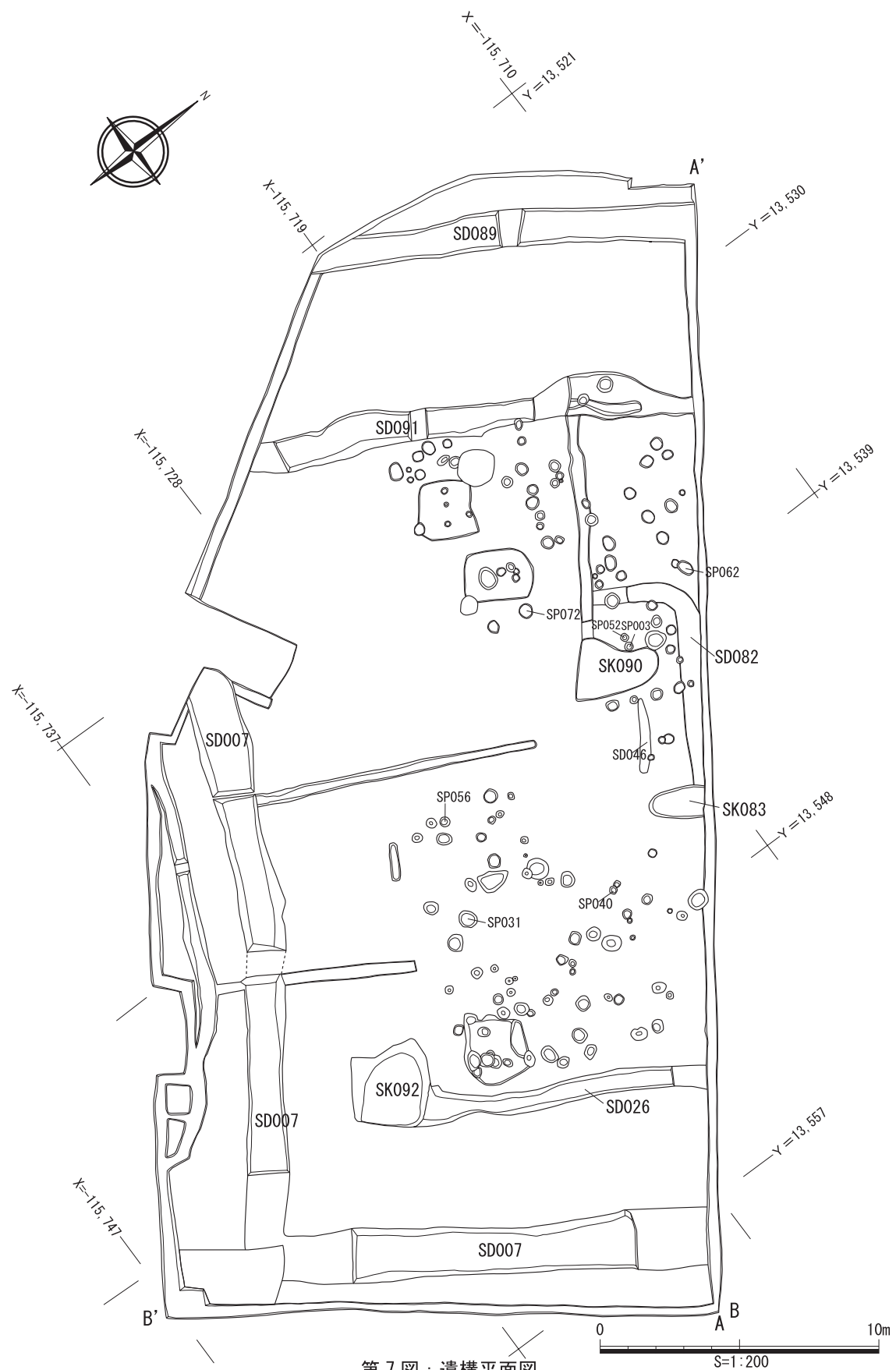
今回の調査では、溝や土坑、ピットなどを検出した。地を囲む溝の北半分が確認されており、その続きが今回の調査で確認できた。ここでは遺構について述べていく。

### SD 007

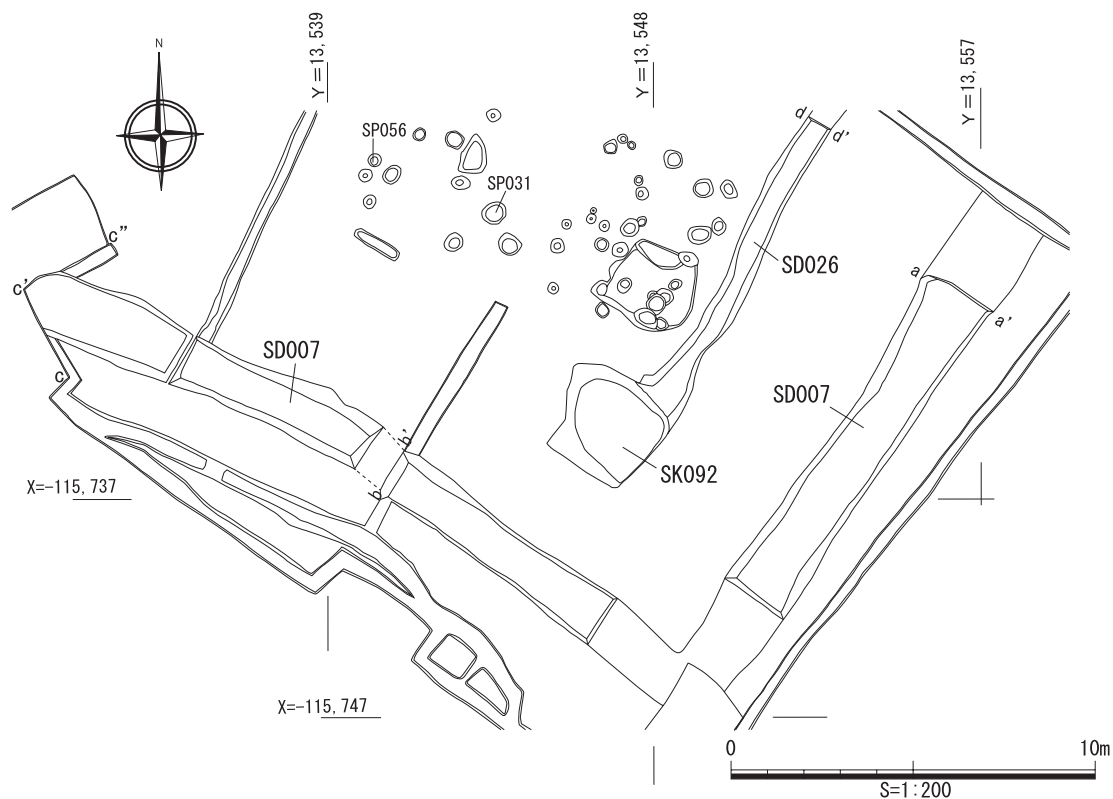
調査区東側および南側で検出した溝で、居館を方形に区画する溝である。平成26年度調査のT4で検出されているS1と同一遺構である。幅1.2～1.5m、深さ0.8mで、溝の底は平坦に掘られている。調査区の東壁に平行し、南東部



第6図：東壁土層断面図



第7図：遺構平面図

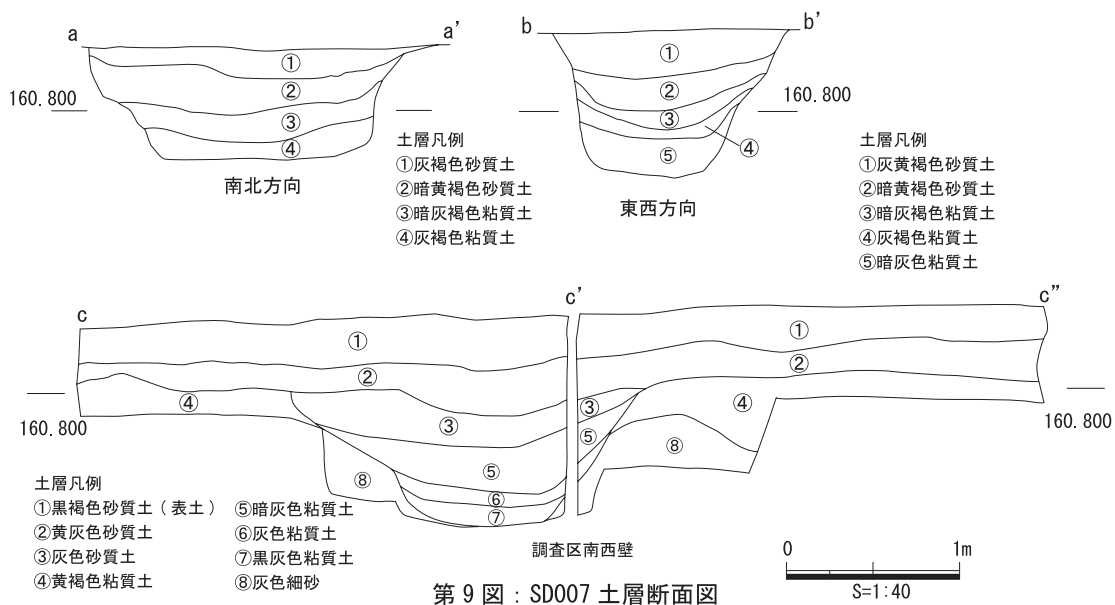


第 8 図：調査区東側平面図

で曲がり、西方向へと調査区外まで延びている。溝が屈曲する地点は現代のかく乱によって破壊されている。埋土の堆積状況は、南北方向は上から①灰褐色砂質土、②暗黄褐色砂質土、③暗灰褐色粘質土、④灰褐色粘質土であり、東西方向は①灰黄褐色砂質土、②暗黄褐色砂質土、③暗灰褐色粘質土、④灰褐色粘質土、⑤暗灰色粘質土である。最下層は粘質が強く、溝が機能していた時に堆積した層であるが、それよりも上層は溝が廃棄されたときに一気に埋められた土であると考えられる。どの層からも土器が出土する。特に東西方向の溝では、下層の粘質土に木片や小さい葉が含まれていた。遺物は信楽焼が多く、瓦器や土師器も出土した。16 世紀の遺物が上層から出土しているというわけではなく、④層や⑤層といった下層からも出土していることから 16 世紀代に周辺が整地された際に溝が埋没したと考えられる。

### SD 089

調査区西側で検出した溝である。平成 26 年度調査の T 4 で検出されている S 3 と同一遺構である。幅 1.2 m、深さ 0.3 m で、溝の底は平坦に掘られている。調査区内を南北方向に貫通し、SD 007 と同様に調査区外へと延びている。SD 007 と南西側の調査区外でつながっているとみられる。SD 007 と比較して、SD 089 は深さが浅くなっている。埋土は暗灰色色粘質土が堆積しており、SD 007 の下層の状況とよく似ている。遺物は出土していないが、平成 26 年度の調査成果を踏まえても居館を囲む溝であることは間違いのないため、SD 007 と同時期の溝であると考えられる。



### SD 026

調査区東側で検出した溝である。幅 0.8 m、深さ 0.15 m である。SD 007 と比較して、幅が狭く、深さも浅くなっており規模が小さい。南でSK 092 と接続する。埋土は上から暗灰色粘質土 (黄褐色ブロック含む)、暗灰色砂質土、暗灰色粘質土である。埋土は分層できるが、ほぼ同一の埋土であると考えられるため。一気に埋められたと考える。遺物は瓦器や土師器のほか、常滑焼が出土しており、埋没時期は 13 世紀前半と考えられる。

### SD 091

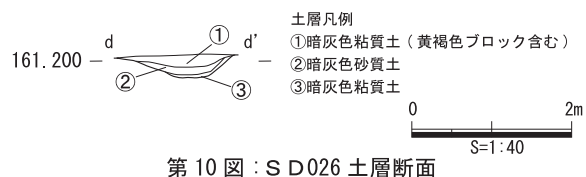
調査区西側で検出した溝である。幅 1.2 ~ 1.5 m、深さ 0.3 m である。SD 089 と平行しており、同様に調査区外へと延びている。埋土は黒灰色粘質土である。遺物は瓦器、信楽焼などが出土している。13 世紀の瓦器や 16 世紀後半の信楽焼が埋土から一緒に出土しているため、16 世紀後半に埋没したと考えられる。

### SD 082

調査区北側で検出したL字状に曲がる溝である。幅 0.7 m、深さ 0.1 m である。調査区北壁と平行し、SK 083 に切られている。屋敷地内を区画する溝であると推定される。埋土は黒灰色粘質土で、炭が多く含まれていた。平成 26 年度の調査では、T 4 の建物 17 の柱穴にも炭が多く含まれており、火災が想定されていることから今回の調査でも火災の痕跡が確認された。遺物は瓦器や土師器の羽釜、完形の土師器皿が多く出土した。他の遺構と比較しても多くの遺物が出土している。時期は 13 世紀頃と考えられる。

### SK 083

調査区北側で検出した楕円形の土坑である。調査区外へと延びるため、正確な規模は不明だが、長辺 1.5 m、短辺 1.2 m、深さ 0.3 m である。平成 26 年度調査の T 4 の S 73 と同一遺構であ



ると考えられる。SD 082 を切る状態で検出した。埋土は暗茶褐色で、遺物は瓦器や土師器が多く出土した。時期は 13 世紀代と考えられる。

#### SK 092

調査区東側で検出した方形の土坑である。長辺 2.9 m、短辺 2.4 m、深さ 0.4 mで、SD 026 と接続している。埋土は暗灰色粘質土で一部黄褐色土が含まれる。遺物は瓦器や土師器、信楽焼、常滑焼が出土している。埋没時期は 16 世紀後半であると考えられる。接続する SD 026 は埋没時期が 13 世紀前半であることから、埋没時期に差がある。

### 第 4 節 出土遺物

遺物は、瓦器や土師器、信楽焼、常滑焼、中国製陶器が出土している。ここでは、出土した遺物について図化できるもの、もしくは遺構の年代を判断することができる遺物について、出土遺構別に述べていく。

#### SP 003

SP 003 からは瓦器のほか土師器の小片が出土している。時期は 13 世紀前半と考えられる。

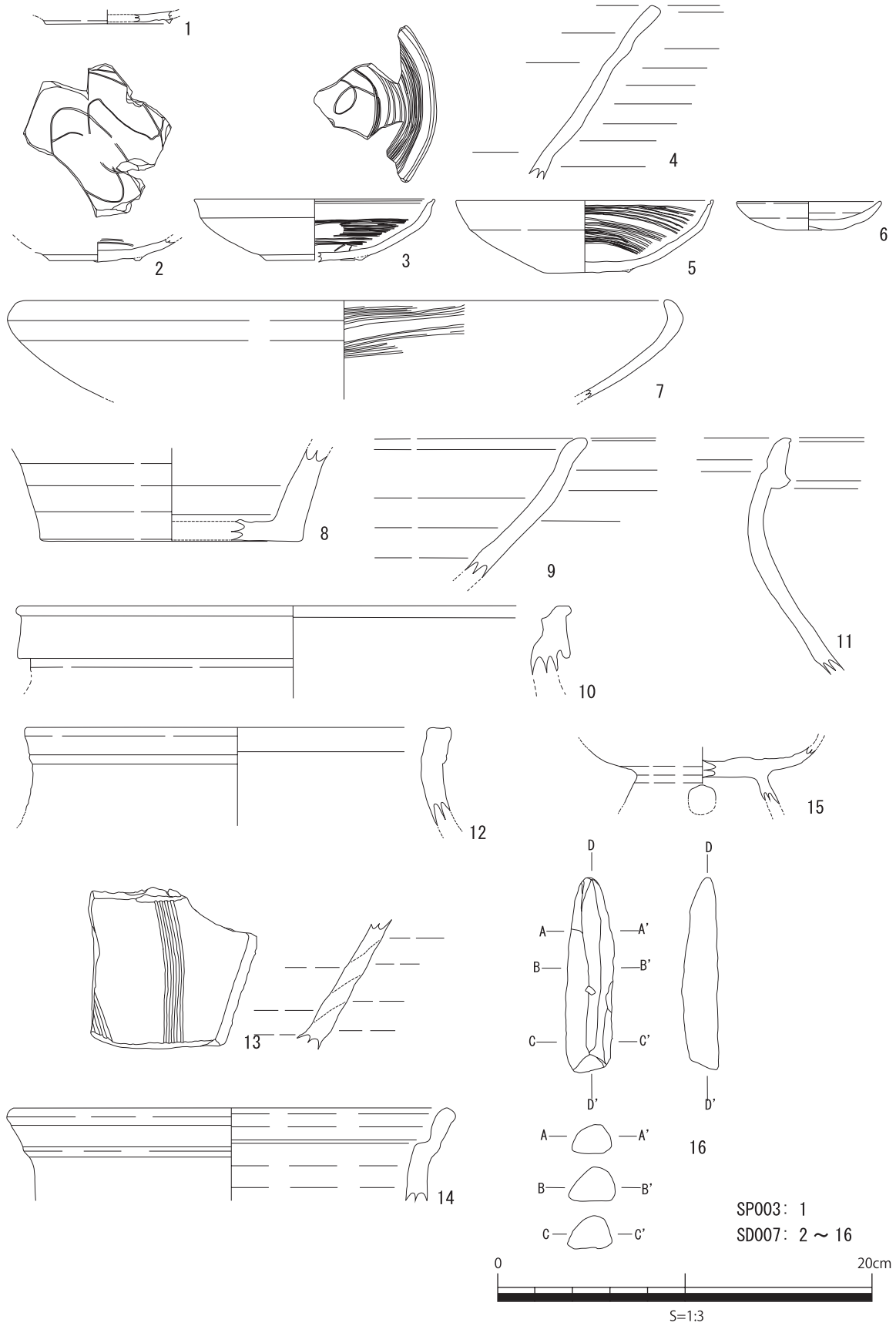
1 は瓦器碗である。底部のみの残存である。見込みの暗文は摩滅により確認できない。高台部は粘土紐をやや逆三角形状になるようにナデによって貼り付けている。

#### SD 007

SD 007 からは瓦器、土師器、信楽焼などの陶器が出土しており、一部時期が遡る須恵器が出土している。時期は大きく分けて 2 時期に分けられる。瓦器や土師器を中心とする 13 世紀代と信楽焼を中心とする 15 世紀後半から 16 世紀である。

2～6 は 13 世紀代のグループである。2・3・5 は瓦器碗である。口径は 13.0～13.9cmで、器高は 3.3～4.8cmである。見込みのミガキは、2～3 回転の輪状であると考えられるが、5 は摩滅により不明である。高台部は粘土紐を簡単に貼り付けたものであり、底部が高台部よりも下に突き出ているため、高台としての機能を果たしていない。4 は常滑焼の片口鉢である。6 は土師器皿である。口縁から底部にかけて残存しており、口径が 7.8cmである。口縁から体部をナデで調整し、口縁端部を丸く収める。7～14 は 15 世紀後半から 16 世紀後半のグループである。7 は土師器の焙烙である。口縁から体部にかけて残存し、口径は 24.2cmである。内面はハケ目が確認でき、体部外面はケズリが施されている。体部には煤が付着している。

8 は信楽焼の壺もしくは甕の底部である。底径は 14.6cmである。9 は信楽焼の捏鉢と考えられる。口縁端部は外側に向けてつまみ上げている。色調は明灰褐色を呈している。10 は信楽焼の甕である。口縁のみの残存で、口径は推定 30cmである。色調は赤褐色で、よく焼き締まっている。11 は信楽焼の甕である。12 は信楽焼の甕である。口縁のみの残存で、口径は 23.0cmである。色調は赤褐色であり、焼き締まっている。13 は信楽焼の搦鉢である。体部のみの残存であるが、4 条 1 単位の搦目が確認できる。14 は信楽焼の甕である。口縁のみの残存で、口径は 24.2cmである。N 字状口縁が委縮したよ



第11图：出土遺物実測図①

うな形態をしており、内面には凹線が巡る。

15は須恵器の高杯である。脚部には円形の透かしが確認できる。陶邑編年のTK 73型式に該当する。この時期はT 2・T 3で検出されている竪穴建物と同時期である。SD 007を埋める時に古墳時代の遺構を破壊した土で埋めた可能性がある。

16は用途不明の石製品である。全長は11.6cmで、断面が三角形状を呈しており、先端がやや細くなっている。

### **SD 026**

SD 026では瓦器や土師器、陶器が多く出土している。小片であるため図化できるものが少ないが、埋没時期は16世紀後半と考えられる。

17は常滑焼の片口鉢である。口縁から体部が残存している。

### **SP 031**

SP 031からは、瓦器や土師器が出土している。時期は13世紀前半と考えられる。

18は瓦器椀である。体部から底部にかけて残存している。内面のみミガキを施し、見込みのミガキは、2～3回転の輪状であると思われる。高台部は粘土紐を簡単に貼り付けたものである。

### **SP 040**

SP 040からは、瓦器や土師器が出土している。時期は、出土遺物や周りの遺構の状況から13世紀代と考えられる。

19・20は土師器皿である。口径は9.0cmで、口縁をナデで調整し、端部を丸く収める。

### **SD 046**

SD 046からは、瓦器や土師器、陶器が出土している。時期は13世紀前半と考えられる。

21は土師器の羽釜である。口縁から体部まで残存し、口径は18.0cmである。内面にはハケ目が確認できる。

### **SP 048**

SP 048からは土師器が多く出土しており、瓦器は小片が数点出土している。時期は13世紀前半と考えられる。

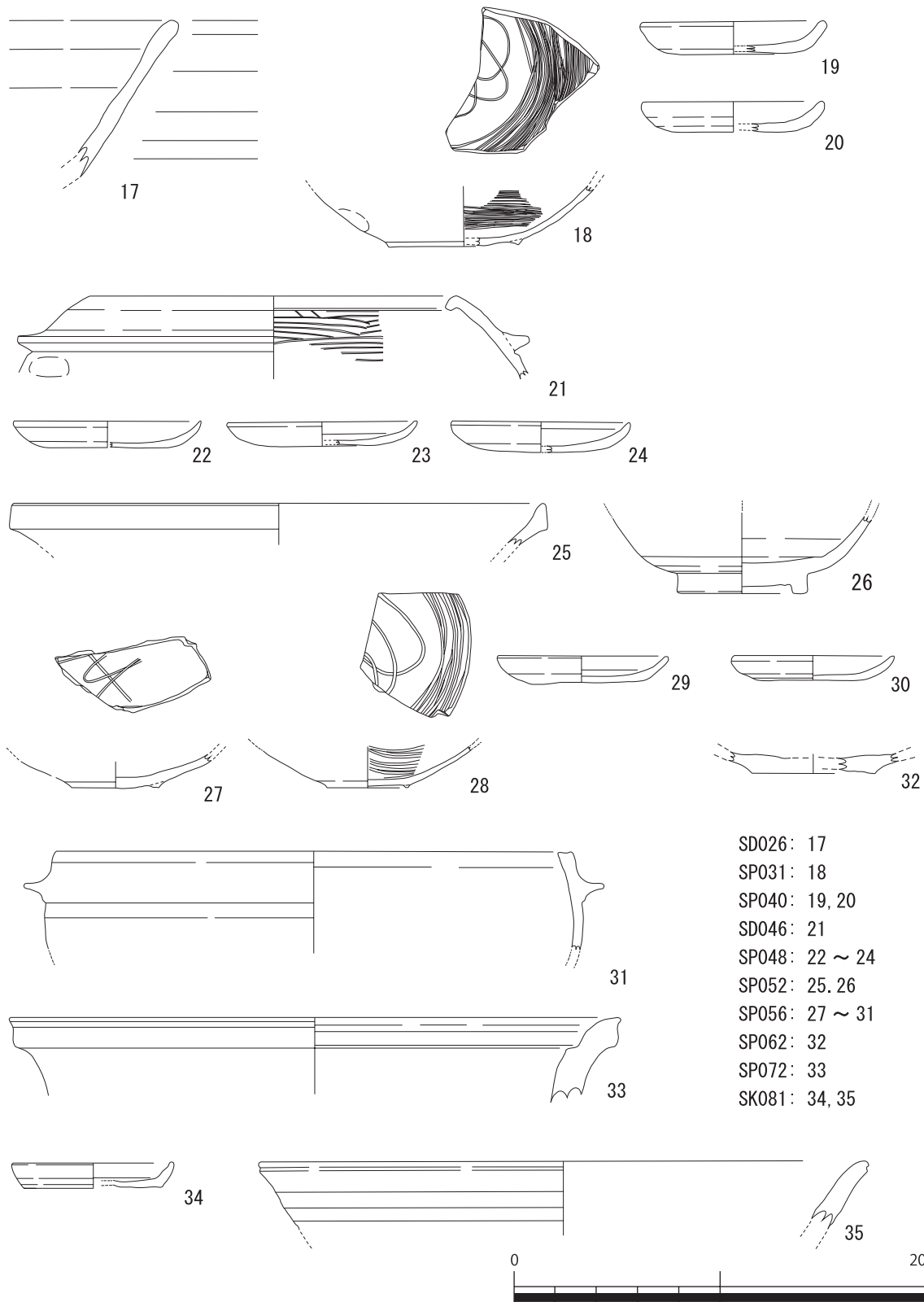
22・23・24は土師器皿である。口径は8.8～9.4cmで、口縁はナデで調整し、端部はつまみ上げている。

### **SP 052**

SP 052からは東播系須恵器や中国製陶磁器の他に小片の瓦器、土師器が出土している。時期は12世紀後半から13世紀初めと考えられる。

25は東播系須恵器の片口鉢である。口縁のみが残存している。内外面ともにナデで調整し、端部の断面が三角形に近い形状をしている。26は青磁の椀である。体部から底部にかけて残存し、高台径は3.2cmである。内外面ともに暗灰緑色の釉薬が施されるが、底部外面は露胎している。





- SD026: 17
- SP031: 18
- SP040: 19, 20
- SD046: 21
- SP048: 22 ~ 24
- SP052: 25, 26
- SP056: 27 ~ 31
- SP062: 32
- SP072: 33
- SK081: 34, 35

第 12 図：出土遺物実測図②

### SP 056

SP 056 からは瓦器、土師器が出土している。時期は13世紀前半と考えられる。27・28は瓦器椀である。底部のみ残存しており、高台径は4.4cmと4.0cmである。見込みのミガキは、2～3回転の輪状であると思われる。高台部は粘土紐を簡単に貼り付けたものであり、高台としての機能を果たしていない。29・30は土師器皿である。口径は8.5cmと8cmで、口縁は一段ナデで、端部は外方へ延びる。31は瓦質の羽釜である。口径は25.4cmで、内面のみ炭化物が付着する。

### SP 062

SP 062 からは、瓦器、土師器、陶器が出土している。時期は13世紀と考えられる。32は陶器の皿である。底部のみの残存で、底部外面には糸切り痕が明瞭に残る。小片であるため、詳細は不明である。

### SP 072

SP 072 からは、小片の瓦器、土師器が出土している。13世紀代の遺物も含まれるが、16世紀と考えられる。33は信楽焼の甕である。口縁のみ残存しており、口径は推定30cmである。

### SK 081

SK 081 からは、瓦器と土師器が多く出土している。また、少量であるが信楽焼などの陶器類も出土している。34は土師器の皿である。口縁から底部にかけて残存し、口径は8cmである。底部から体部にかけて強く屈曲する。35は常滑焼の片口鉢である。口縁のみの残存で、口径は推定30cmである。内外面に自然釉がかかり、口縁端部には沈線が入る。

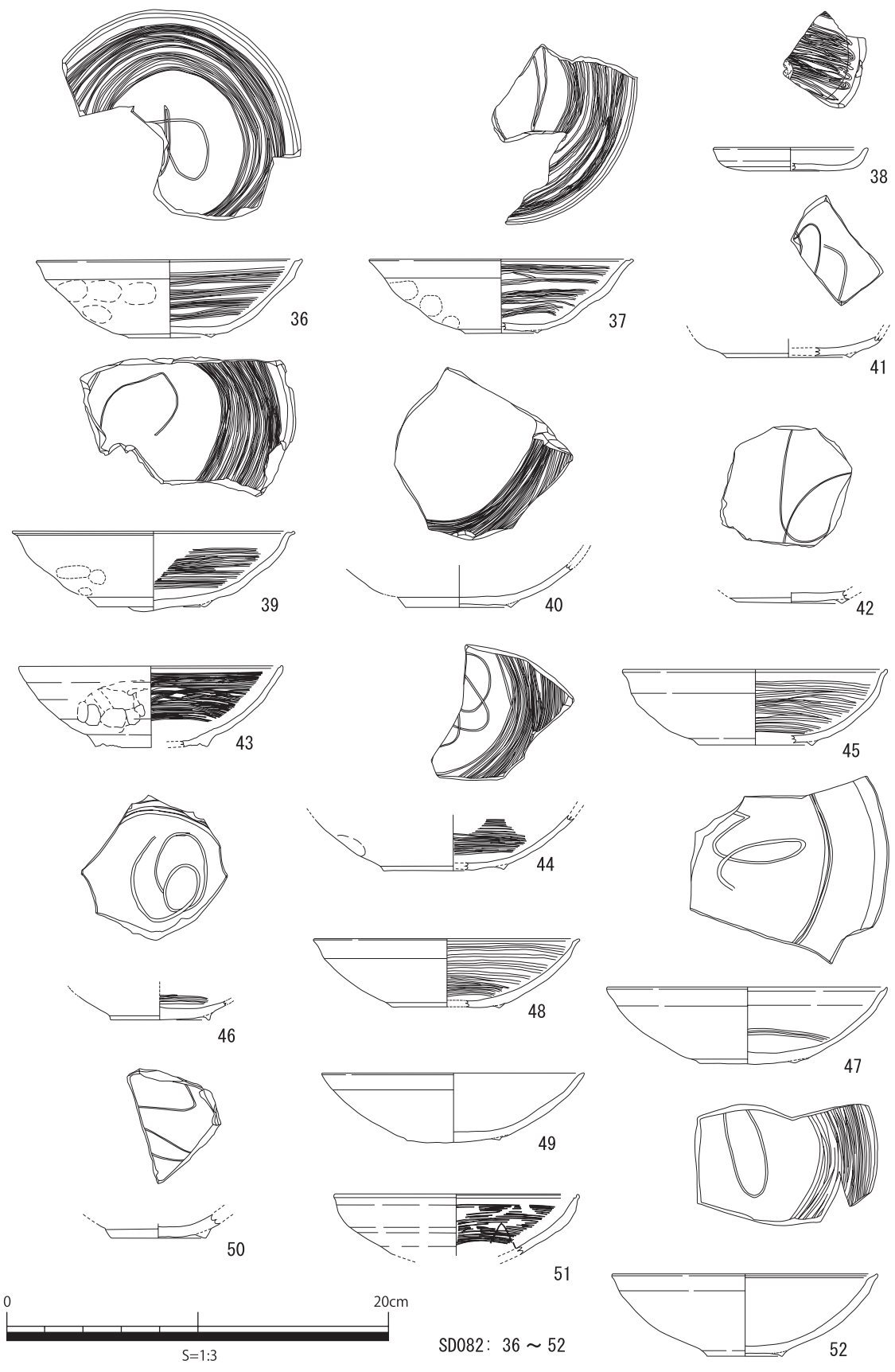
### SD 082

SD 082 では、瓦器、土師器が大量に出土している。また埋土には炭も含まれている。他の遺構と比較して、完形もしくは完形に近いものが多く出土している。時期は13世紀前半から後半と考えられる。

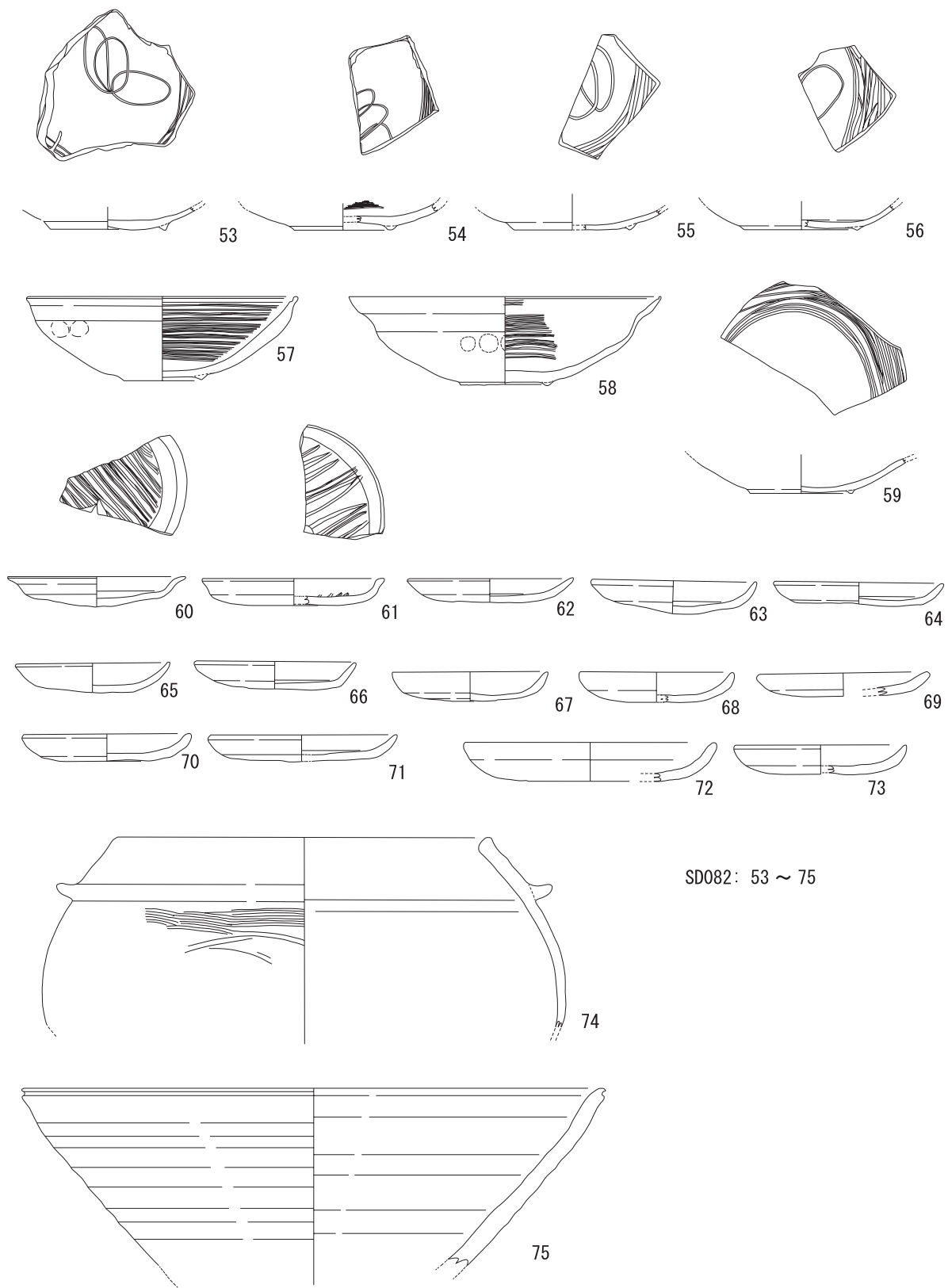
36・37・39～59は瓦器椀である。口径が14cm前後のものが多いが、51は13.0cmとやや小さく、58は16.0cmと大きい。器高も4cm前後のものがほとんどである。全て外面のミガキはなく、内面のみミガキを施す。見込みのミガキは、確認できるもののほとんどが2～3回転の輪状である。口縁が残存しているもので、49以外は口縁端部に沈線が入る。高台は粘土紐を簡単に貼り付けたものがほとんどで、高さはなく、39・43・44・46～50・53・55・59については高台としての機能を果たしていない。

38・60・61は瓦器皿である。口径は8.2～9.4cmで、61は口径が大きい。内面のみミガキを施す。内面のミガキはジグザグ状のものである。

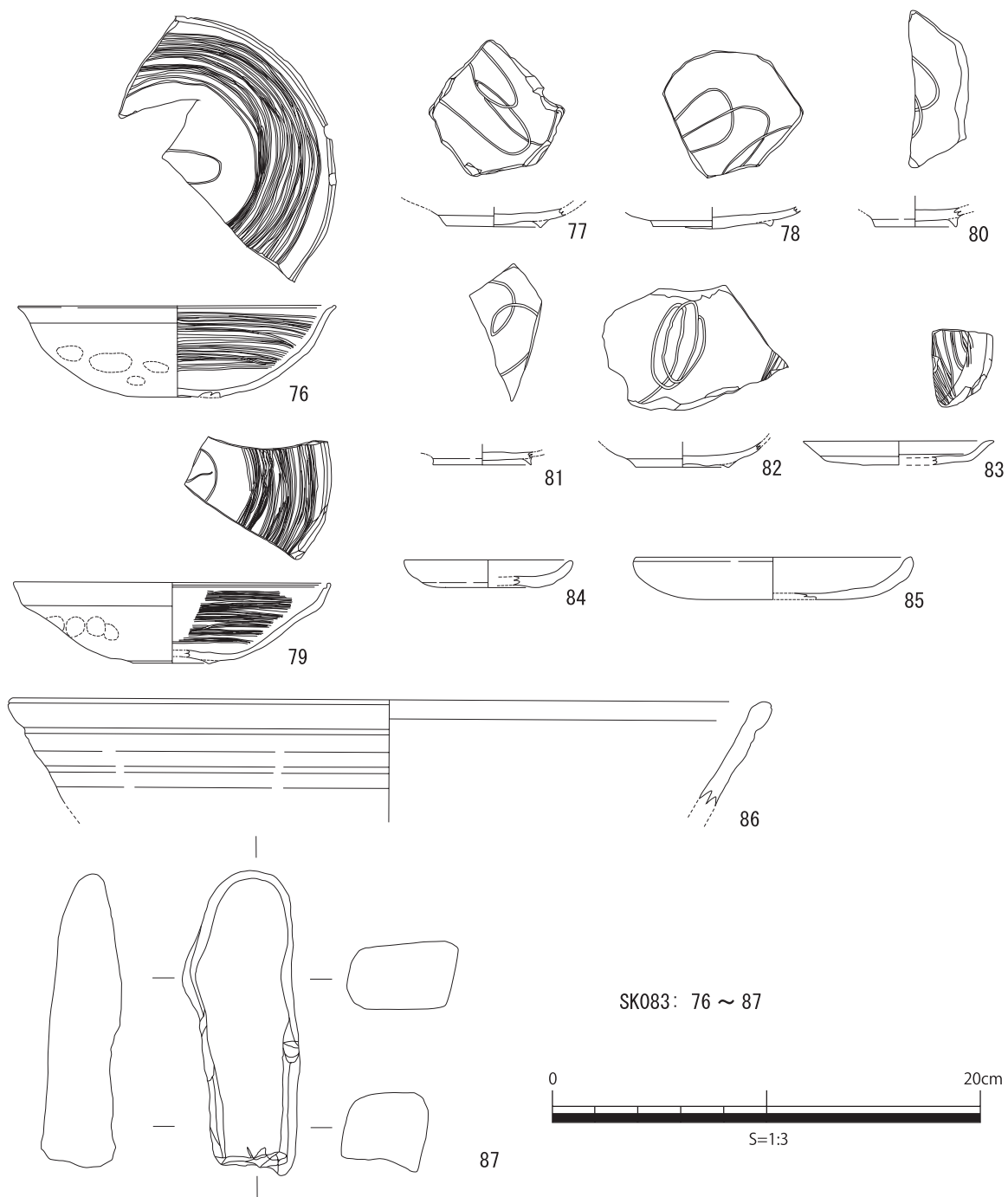
62～73は土師器皿である。72のみ口径が13.0cmと大きく、そのほかは8cm台と9cm台である。口縁はナデにより調整している、62は一部煤が付着しており、灯明皿の可能性はある。



第 13 图：出土遺物実測図③



第 14 图：出土遺物実測図④



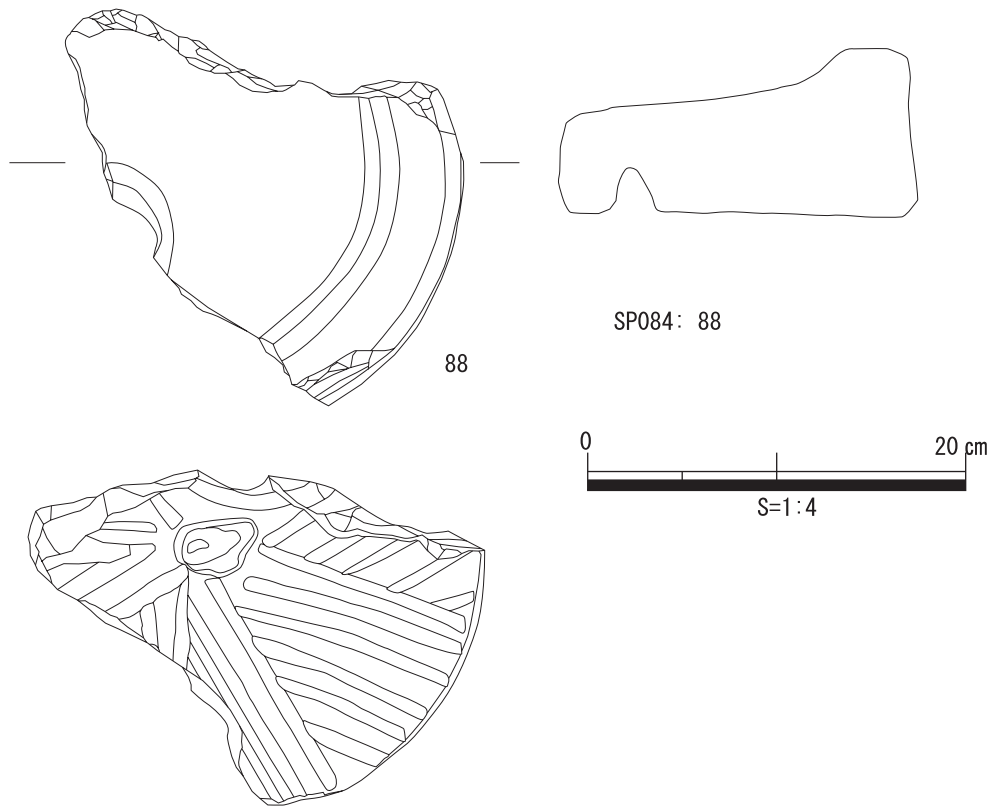
第15図：出土遺物実測図⑤

74は土師器の羽釜である。口径は19.2cmで、内面と体部外面にはハケ目が残る。また体部外面には煤が付着している。75は常滑焼の片口鉢である。口径は推定30cmで、内外面はナデにより調整し、内面には自然釉がかかる。口縁端部には沈線を施す。

### SK 083

SK 083からは、瓦器と土師器が出土している。その他陶器類は確認されていない。SD 082を切っているが、時期は大差ないと考えられる。

76～82は瓦器碗である。76と79のみ口径が復元でき、それぞれ15.0cmで器高は



第 16 図：出土遺物実測図⑥

76 が 4.0cm で 79 が 3.4cm である。口縁に沈線が入る。外面にミガキを施すものではなく、内面のみである。見込みのミガキは 2～3 回転の輪状である。

83 は瓦器皿である。口径は 9.0cm で内面のみジグザグ状のミガキが施される。口縁端部が外方へ広がる。

84 は土師器の皿である。口径は 8cm で、口縁はナデを施す。85 は土師器の皿である。口径は 13.2cm で、器面は摩滅により調整が不明である。

86 は常滑焼の片口鉢である。口径は推定 36cm で、内外面ともにナデによって調整している。口縁端部に沈線を施す。色調は赤褐色を呈している。

87 は叩石と思われるが詳細は不明である。先端は摩滅によって丸みを帯びている。

#### SP 084

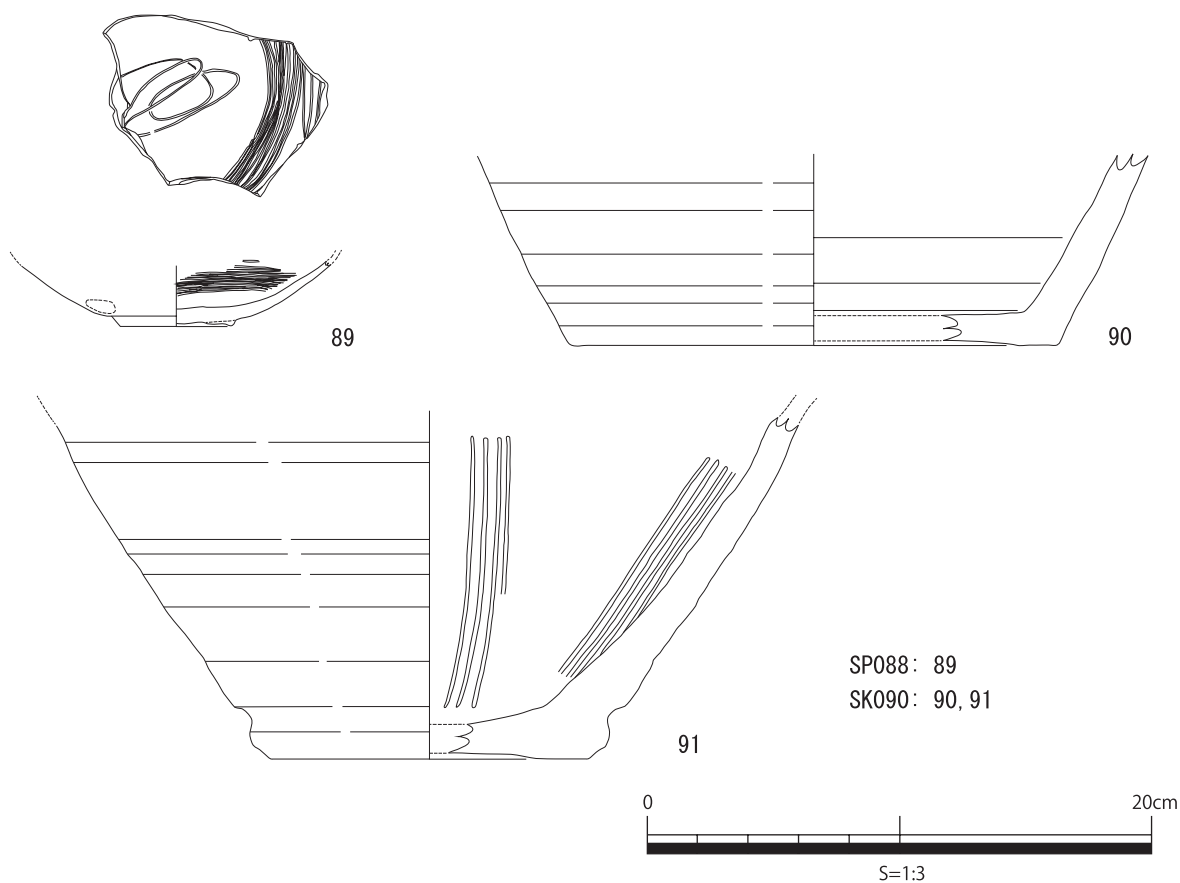
SP 084 からは小片の瓦器、土師器のほかに石臼が出土している。時期は 16 世紀と考えられる。

88 は石臼である。上臼で、中央に下臼と固定するための芯棒孔が開けられている。また、穀類を入れるための供給口の一部が確認できる。粉を碾くための溝は 6 分画である。割れた状態でピットから出土している。

#### SP 088

SP 088 からは瓦器のみの出土である。時期は 13 世紀前半と考えられる。

89 は瓦器碗である。体部から底部にかけての残存で、高台径は 4.5cm である。見込みのミガキは、2～3 回転の輪状である。高台は粘土紐を簡単に貼り付けている。



第 17 図：出土遺物実測図⑦

### SK 090

SK 090 からは、瓦器と土師器の小片が数点と、信楽焼が出土している。16 世紀前半ころと考えられる。

90 は信楽焼の甕もしくは壺である。底部のみ残存している。体部内外面はナデで調整し、底部は未調整である。91 は信楽焼の播鉢である。口縁端部が欠けているが、おおよそ口径が復元でき、約 30cm であると考えられる。播目は 1 単位が 4 条である。

### SD 091

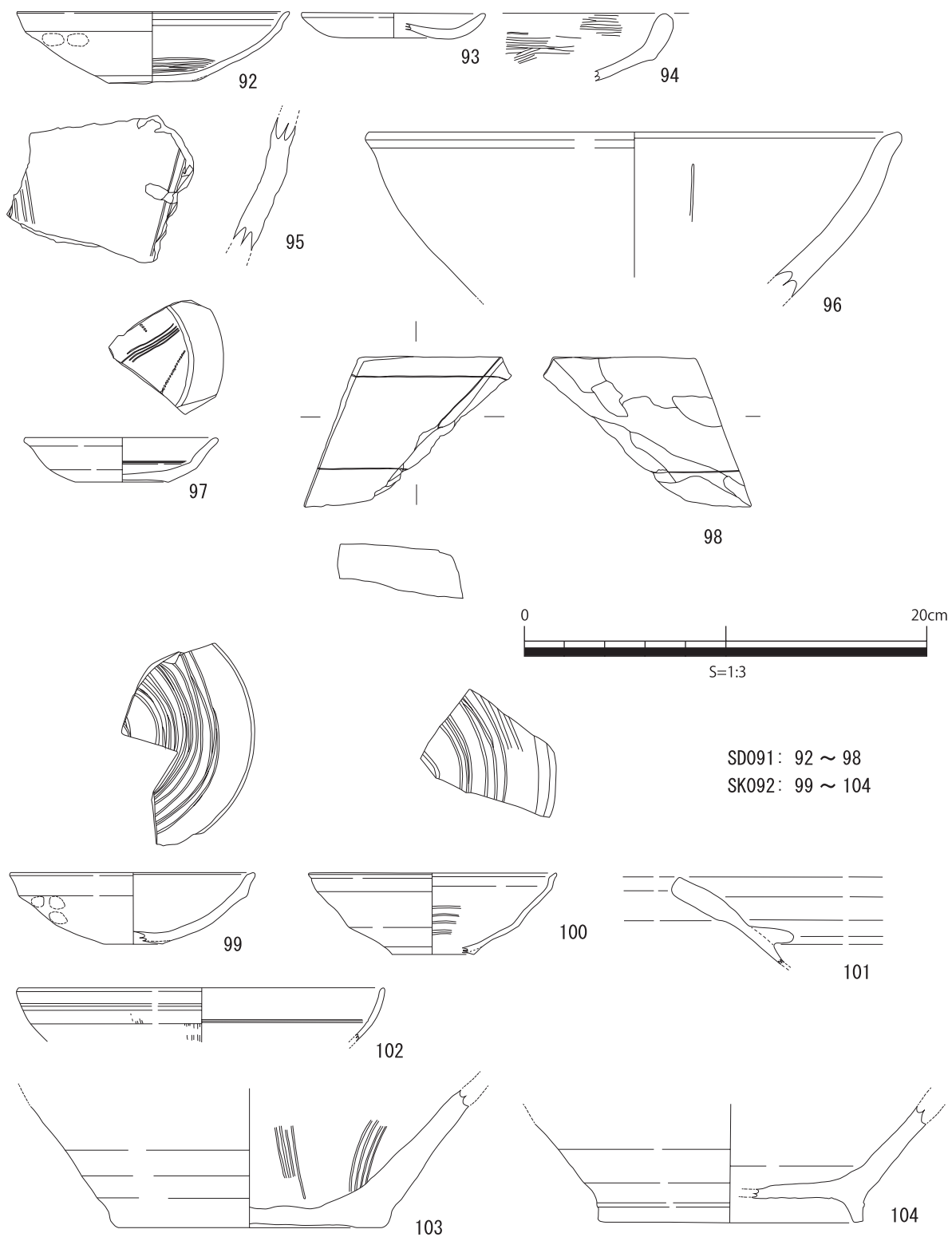
SD 091 からは、瓦器や土師器、陶器類が出土している。時期は 13 世紀代と 16 世紀代に分けられ、SD 007 と同じような様相を呈しているが 15 世紀後半ころの播鉢も出土している。

92 は瓦器碗である。SD 091 の底から出土している。口縁から底部にかけて残存し、口径は 13.7cm で、器高は 3.2cm である。内外面ともに摩滅しているが、内面の一部にミガキが確認できる。高台は粘土紐を簡単に貼り付けたもので、高さはない。

93 は土師器皿である。口径は 9.2cm で、口縁はナデにより調整している。

94 は土師器の焙烙である。口縁から体部にかけて残存している。体部外面はケズリによって調整する。

95 は信楽焼の播鉢である。体部のみの残存である。播目が確認できるが、何条であるかは不明である。色調は明灰褐色である。



第 18 図：出土遺物実測図⑧

96 は信楽焼の播鉢である。口径は 26.6cm で、口縁端部がやや外反する。播目は 1 条である。口縁内外面に煤が付着する。色調は灰白色で、胎土の長石が目立つ。

97 は同安窯系の青磁皿である。内面と口縁外面のみ釉薬がかかり、底部外面は露胎



している。色調は緑灰色を呈している。見込みには櫛描文が残る。

98は砥石である。

### SK 092

SP 092は瓦器、土師器をはじめ信楽焼や青磁なども出土している。時期は13世紀代と16世紀代に分けられる。

99・100は瓦器椀である。99の口径は12.2cmで、器高は3.6cmであり、100の口径は12.4cmで、器高は4.1cmである。内面のみミガキを施し、見込みの暗文は確認できない。高台は粘土紐を簡単に貼り付けたものがあるが、底部が高台よりも下に突き出ているため、高台としての機能を果たしていない。

101は土師器の羽釜である。内面のハケ目は器面の摩滅により不明である。体部と比較して口縁がやや厚い。

102は青磁の皿である。口径は18.4cmである。

103は信楽焼の播鉢である。体部から底部にかけての残存で、播目は4条8単位であることが復元できる。色調は灰白色を呈している。16世紀初頭のものと考えられる。

104は常滑焼の片口鉢である。高台が残存しており、高台径は12.5cmで、台形状を呈している。

## 第4章 まとめ

### 第1節 方形居館について

今回の発掘調査では、調査区東側でL字に曲がるSD 007を検出し、それに対応すると考えられるSD 089を調査区西側で検出した。SD 007とSD 089は調査区南西外で接続していると考えられる。調査区北壁の断面でもこれら二つの溝が確認でき、北側の調査区外へと延びていることがわかった。またSD 007の西4mの地点でSD 026を検出し、SD 089の東5mの地点でSD 091を検出した。SD 026は西へL字に曲がることなく、SK 092に接続していた。調査区南側でサブトレンチを設定し、断ち割りをしたが確認することができなかった。SD 007とSD 089と同様に、調査区北壁の断面で北へ延びていることがわかった。

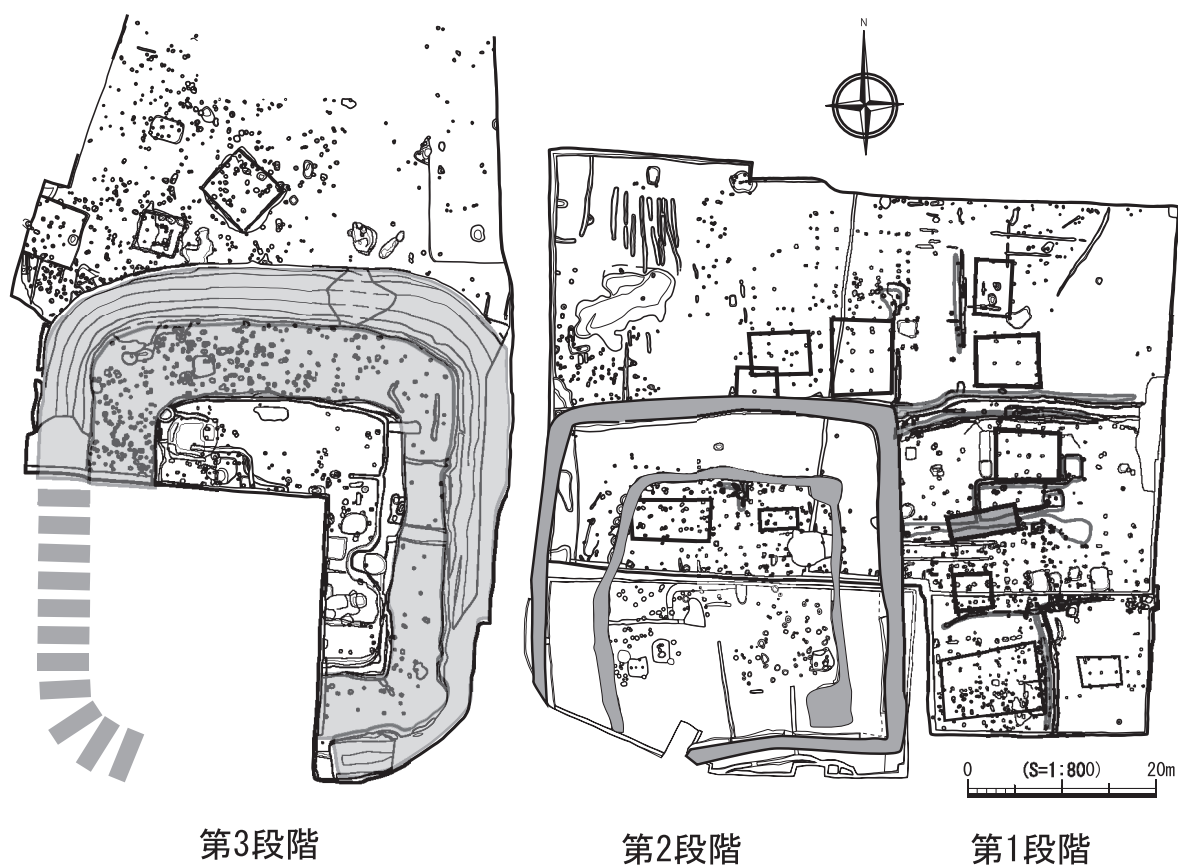


第19図：前回調査時の平面図との合成図

平成 26 年度の調査では今回の調査区北側の T 4 と T 5 で「コ」の字形の溝 S 1 が検出されている。S 1 の幅は 1.8 ～ 2.1 m で、深さは遺構検出面から 50 ～ 60cm である。また、S 1 の内側で幅が 0.8 ～ 1.0 m で、深さが遺構検出面から 20 ～ 40cm の「コ」の字形の溝 S 3 が検出されている。それぞれ調査区壁面の断面観察で南へ延びていることが確認されている。

今回と平成 26 年度の調査成果から、SD 007 と SD 089 は S 1 と、SD 026 と SD 091 は S 3 と同一遺構であることが確認された。溝の内側では掘立柱建物が検出されていることから、東西 40 m、南北 38 m の二つの溝で区画された方形居館であることが明らかとなった。SD 007・089 と S 1 は外側の溝で、SD 026・091 と S 3 は内側の溝である。外側の溝は四方を囲んでいるが、内側の溝は南側では確認されず、三方だけを囲んでいたと考えられる。

この方形居館内のピットや溝から出土した遺物量は、瓦器をはじめとする 13 世紀代のものが高い割合を占め、14・15 世紀代の出土は少ない。16 世紀代になると少し割合が高くなる傾向がある。対して、方形居館の外側の溝である SD 007 の埋土からは、瓦器や土師器の小片は出土するものの、15・16 世紀の遺物が多く、埋土の下層から 16 世紀後半の遺物が出土している。つまり、埋没したのは 16 世紀後半ごろと考えられる。



第20図：遺構変遷図

## 第2節 中世における貴生川遺跡の変遷

平成26年度と今回の調査によって、中世の貴生川遺跡において2つの大きな画期が認められ、3段階の遺構の変遷が明らかとなった。第1の画期が方形居館の出現で、第2の画期が単郭方形城館の出現である。また、集落から居館、城館へと移る過程が明らかとなり、中世の甲賀地域における一つのモデルが今回の調査成果によって提示することが可能となった。その変遷過程について述べていく。

### 第1段階

この段階では、溝によって建物を明確に区画していない。掘立柱建物が数棟建つ、散村的集落である。時期は12世紀から13世紀前半である。また建物の規模などによって、集落の中で権力を持つ者がいたのかどうかについて想定することができない。

### 第2段階

第2段階では、溝で囲まれた方形居館が出現する。この方形居館の出現が第1の画期である。時期は13世紀前半から16世紀後半である。方形居館の東側には、この段階の掘立柱建物があるが、区画溝が付随するのみである。この方形居館は明らかに他の建物と区別するために溝が掘削されており、一辺約40mと規模が大きいものになる。これは方形居館の主である在地領主と家臣もしくは庶民の差を表わし、規模が大きくなるのも、在地領主にふさわしいものにするためであると考えられる。この段階は西側の単郭方形城館が築かれた16世紀後半に終わりを迎え、城館を築城する際に溝などの遺構は完全に埋められ、整地されたと考えられる。しかし、13世紀から16世紀後半にかけてずっと使用されていたとは言い切れない。方形居館内の遺物の出土量から見ても、13世紀後半にピークを迎え14世紀になると出土量は減る。そして、15世紀ごろからは増え、16世紀後半に13世紀ほどではないが2回目のピークがある。13世紀のピークを迎えた後に溝が埋没せず、16世紀後半に一気に埋没したのは、それまで溝の維持管理が行われていたからであると考えられる。

### 第3段階

第3段階では単郭方形城館が出現する。方形居館と比較して、堀と土塁を備え防御機能が強化された城館である。時期は、16世紀後半ころから17世紀前半で、単郭方形城館が出現し、廃絶するまでの段階である。平成25・26年度の調査では、16世紀後半に築城もしくは改修が行われたと報告されているが、今回の調査結果から考えてもその時期に城館付近の整地を行い、城館が築城されたとみてよいのではないかと考える。16世紀後半に城館は築城され、豊臣秀吉の甲賀武士の改易処分、いわゆる「甲賀ゆれ」で中世以来の甲賀郡中惣が解体されるまで機能していたと考えられる。

## 第3節 まとめ

この変遷の中で注目すべきことは、方形居館から単郭方形城館へと変遷していく中で、堀と土塁が備わり防御機能が高まるが、どちらも一辺約25mと内部空間の規模がほとんど変わらないことであろう。



第21図：遺構変遷図(第1段階)



第22図：遺構変遷図(第2段階)



第23図：遺構変遷図(第3段階)

甲賀郡中惣は在地の土豪たちが互いの財産や地域を守るための連合体であり、この構成員である土豪たちは平等であるということが原則であった。この平等性が基本となる甲賀郡中惣の組織的性格が、単郭方形の半町四方の城館の形態に反映されている。

貴生川遺跡で確認されている城館は、半町四方の単郭方形で16世紀後半の織田信長の近江侵攻を築城（もしくは改修）の契機としている。今回の発掘調査で全体の規模が明らかとなった方形居館は13世紀に造られたもので、単郭方形城館が築かれた16世紀後半よりも前のことである。しかし方形居館と単郭方形城館は内部空間に限って言えば一辺約25mと同規模であり、方形を志向している。内部空間を拡張せず古い段階の方形居館を廃棄し、隣接地に新たに城館を築いたのはどういった要因であるのか、今後の検討課題である。

甲賀市域において、13世紀から16世紀、いわゆる中世の遺跡の発掘調査件数は少なく、貴生川遺跡のように大規模な発掘調査はほとんど行われてこなかった。そのため、その時期の様相については不明な点が多かった。しかし、貴生川遺跡の発掘調査によって中世甲賀の様相を知る一つの手がかりを得ることができ、散村的集落から領主層の方形居館を中心とする集落、堀と土塁を持つ防御機能が強化された城館へ、という流れが一定の範囲内において確認することができた。

発掘調査で明らかとなった方形居館は、甲賀郡中惣や同名中といった自治体制よりも前に造られた居館である。なので、この居館が同名中と関連しているとは言えないが、同名中が組織される前の内貴地域の土豪（後の内貴氏か）の居館であったと想定することができる。今後周辺の発掘調査がさらに進むことに期待したい。

# 写真図版



調査区全景（西から）



調査区全景（北から）





調査区西側



調査区東側



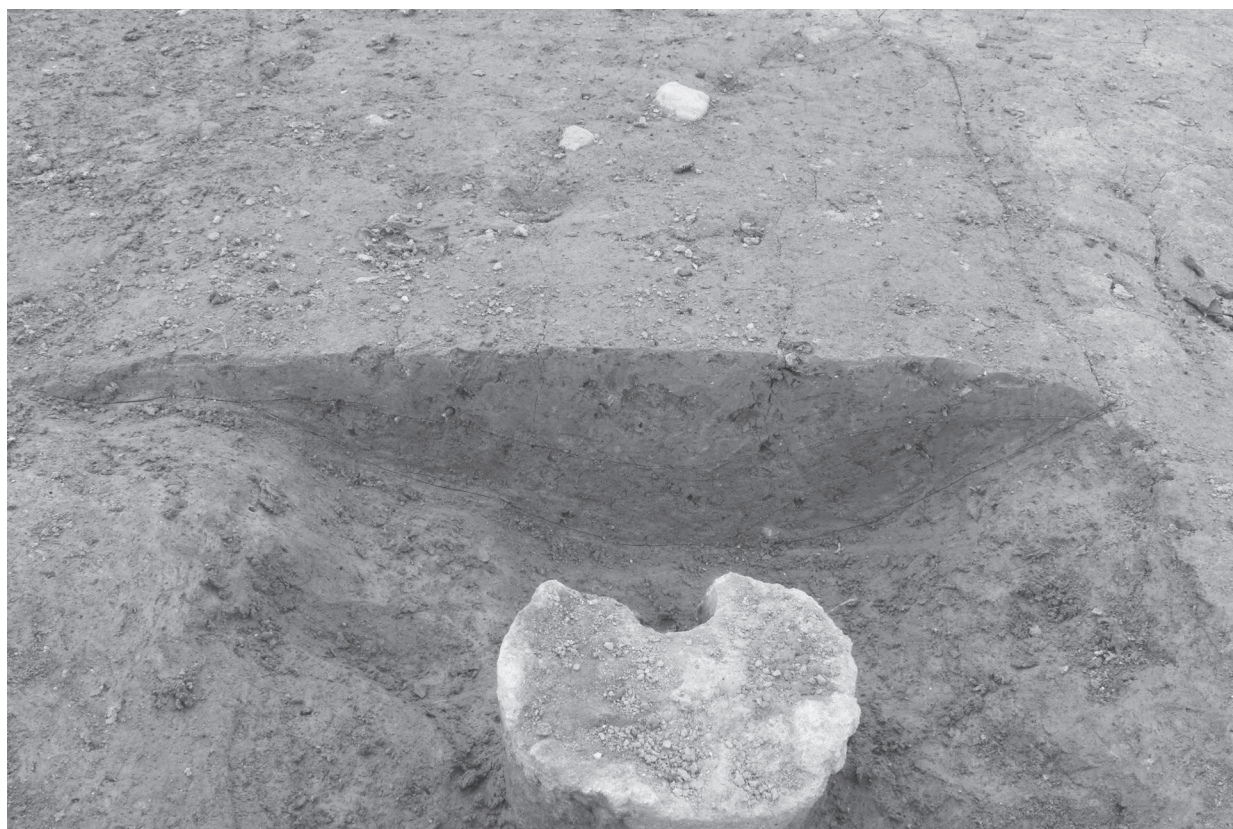
SD007 掘削状況



SD007 堆積状況



SD026 掘削状況



SD026 堆積状況



SD089 完掘状况



SD089 堆積状况



SD089 北壁断面



SD007 南壁断面



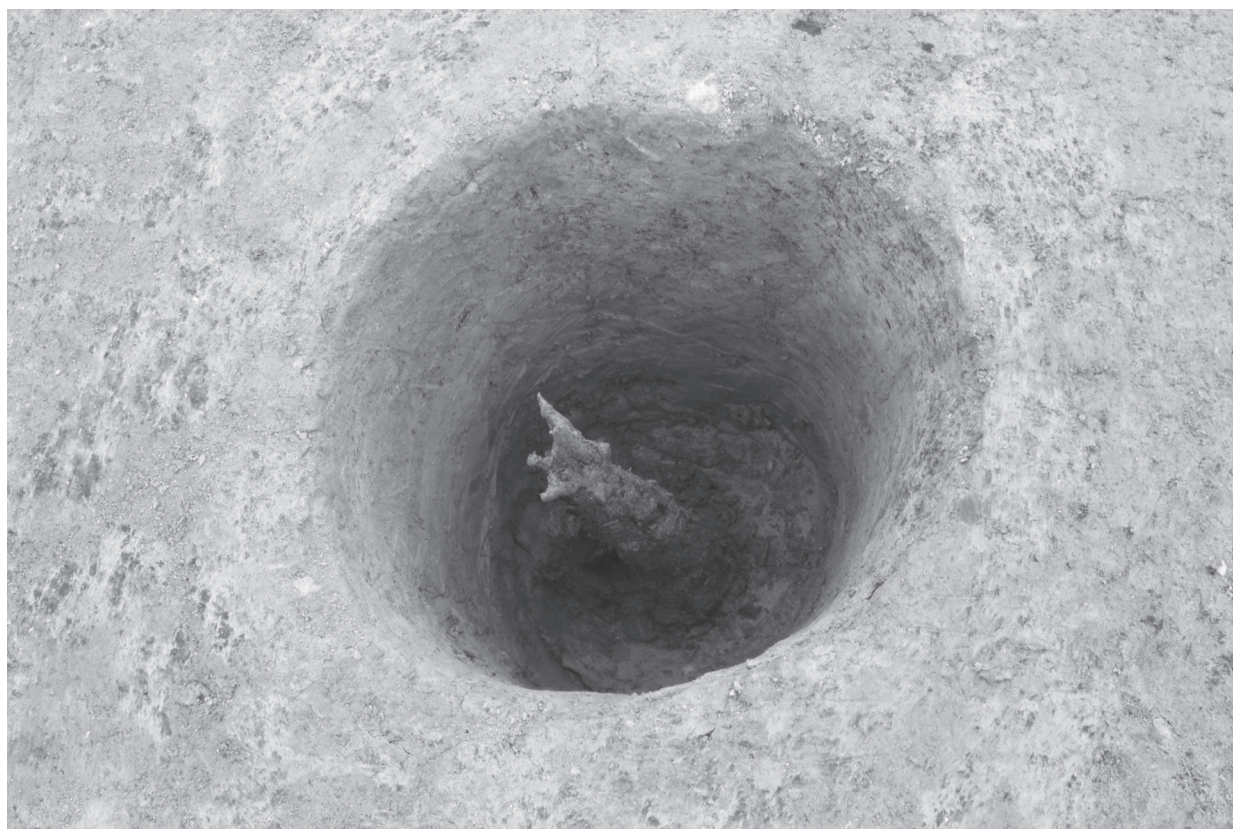
SD082 遺物出土状況



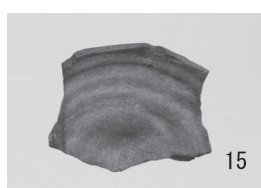
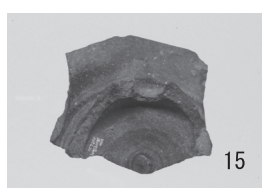
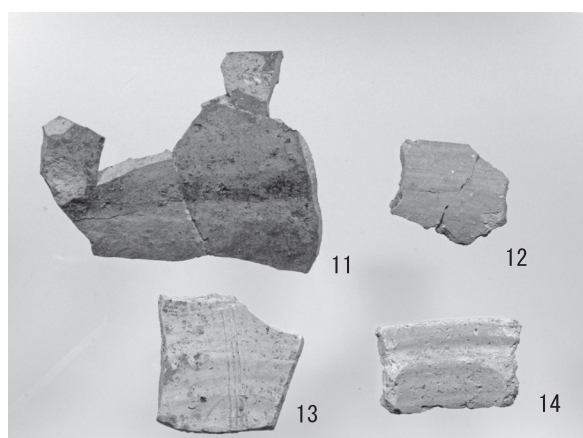
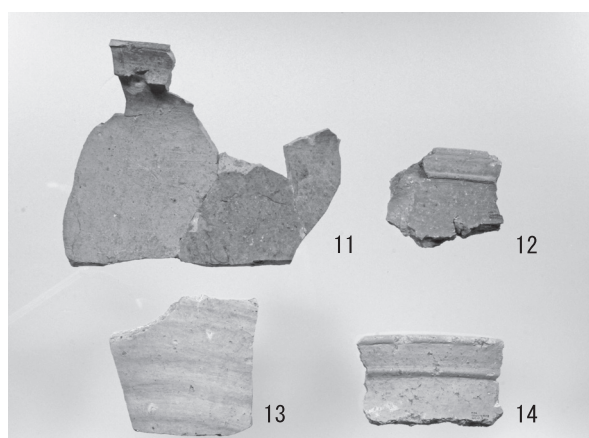
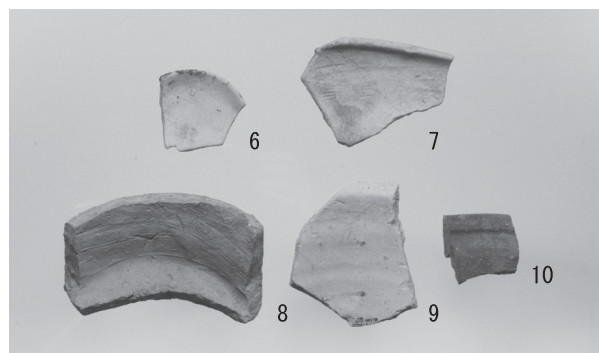
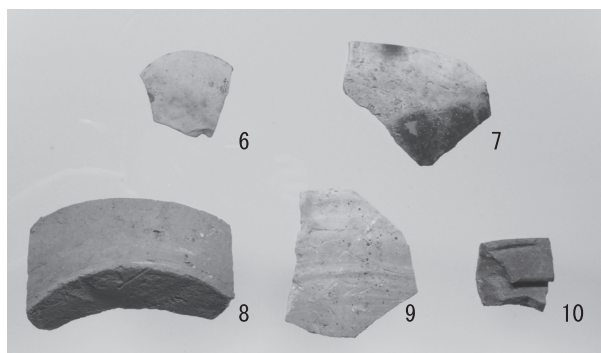
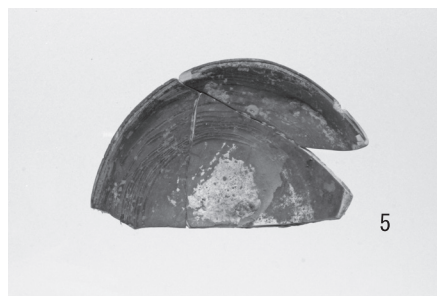
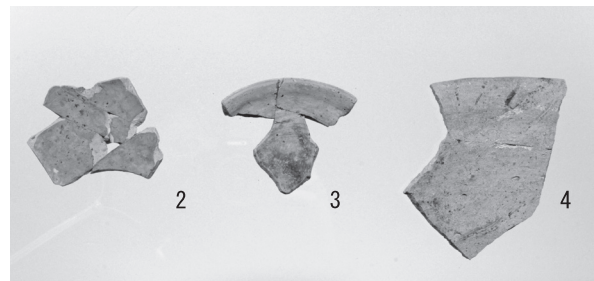
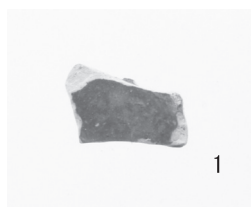
SP084 遺物出土状況



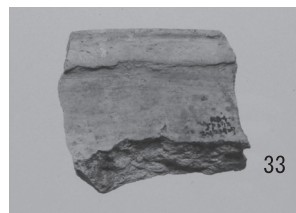
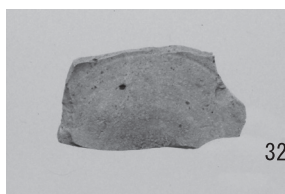
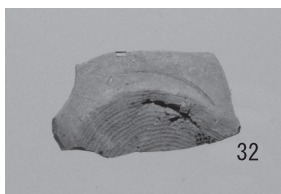
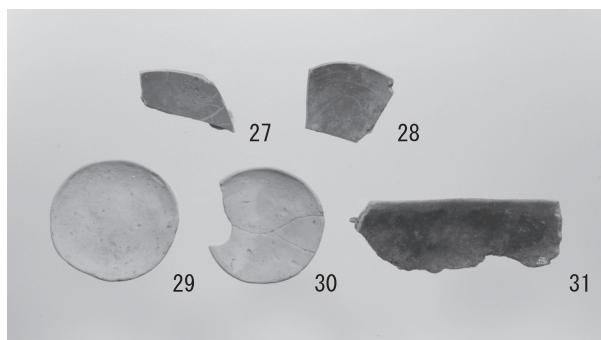
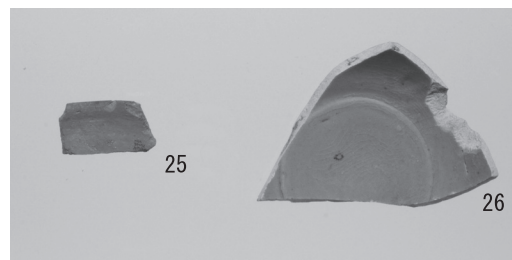
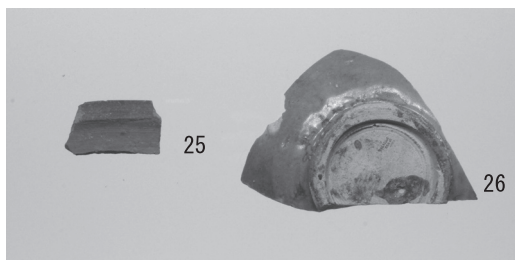
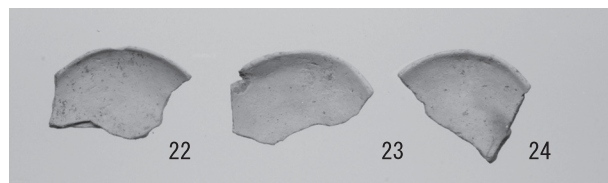
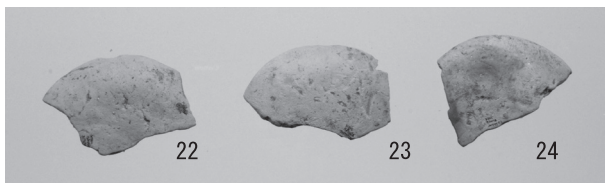
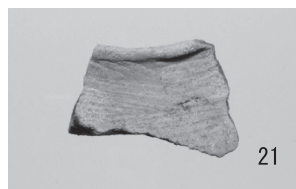
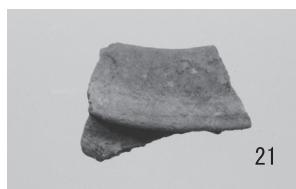
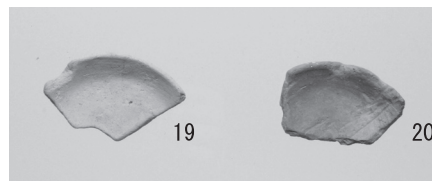
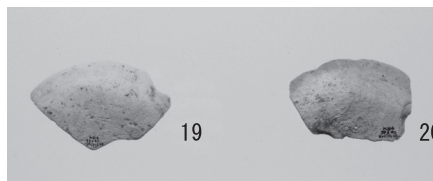
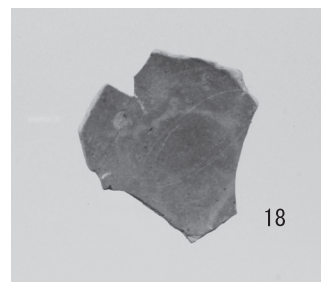
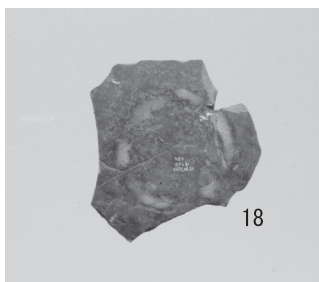
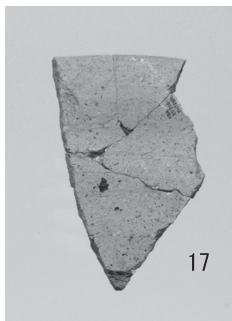
SP052 遺物出土状況

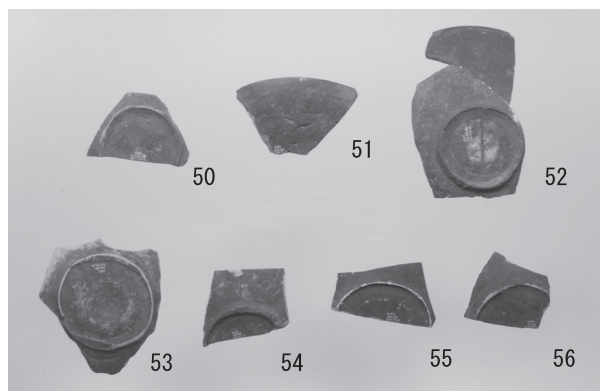
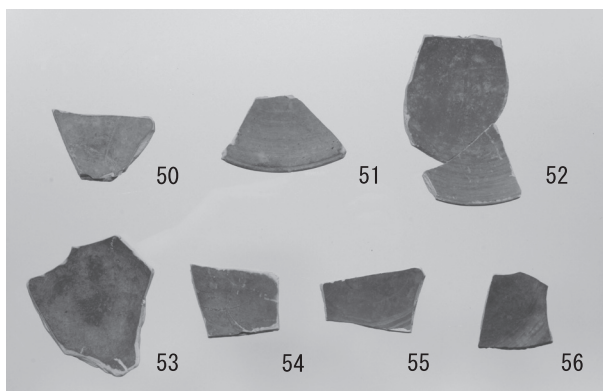
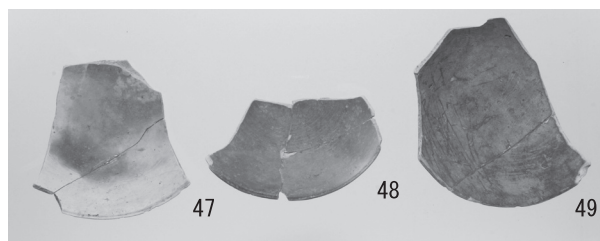
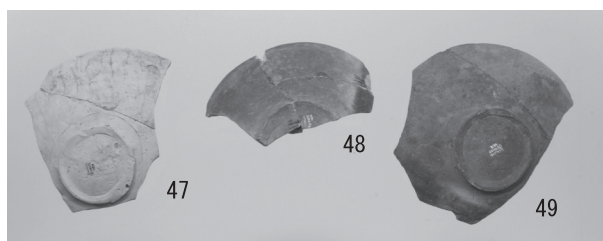
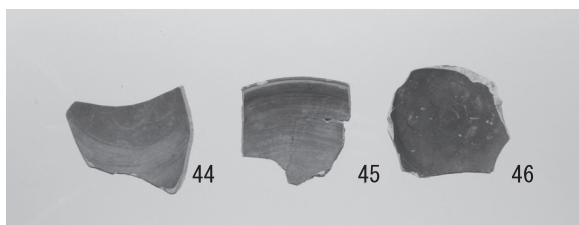
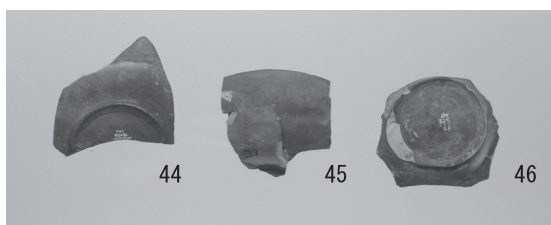
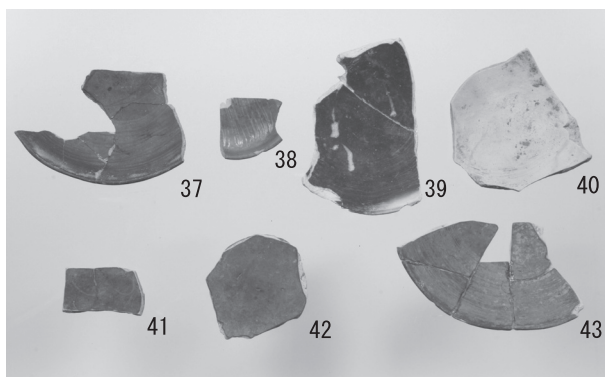
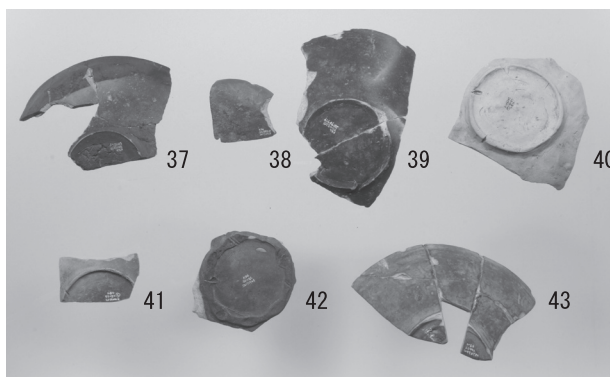
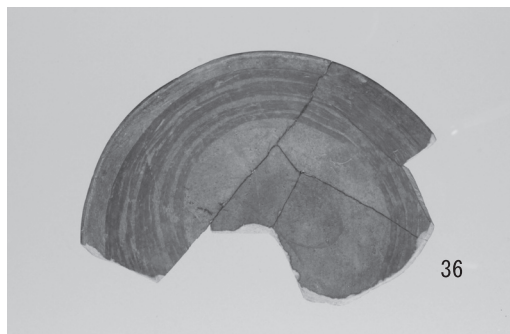
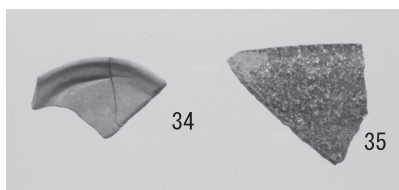
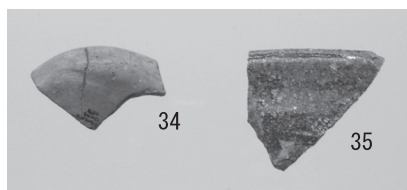


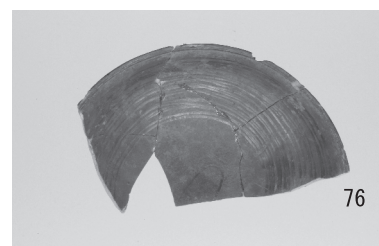
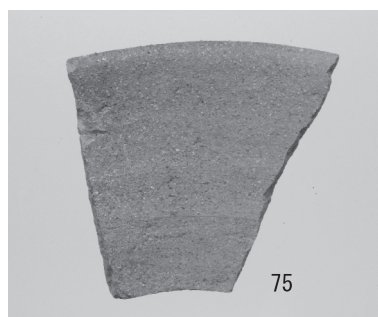
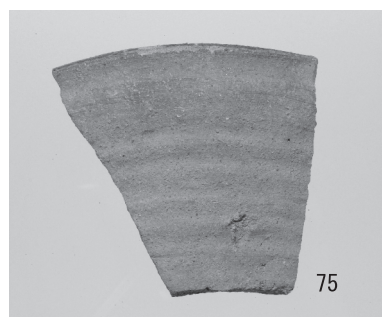
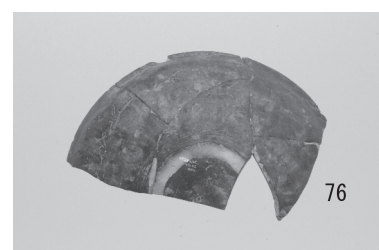
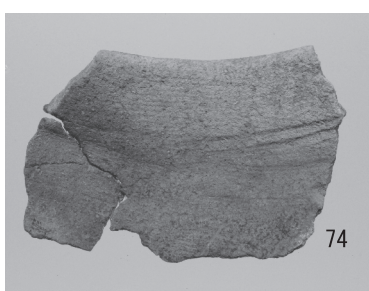
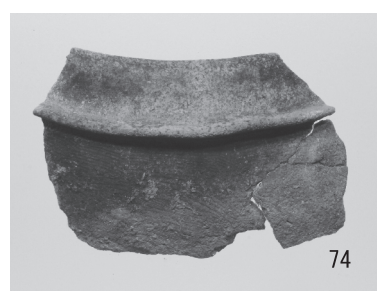
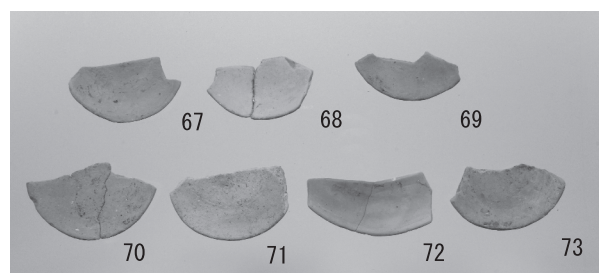
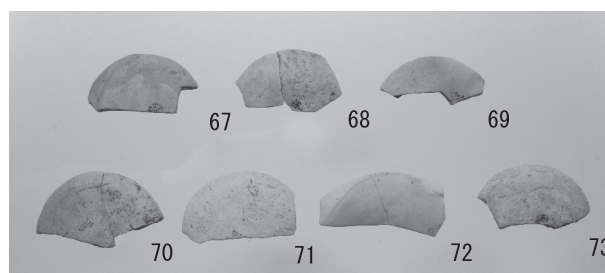
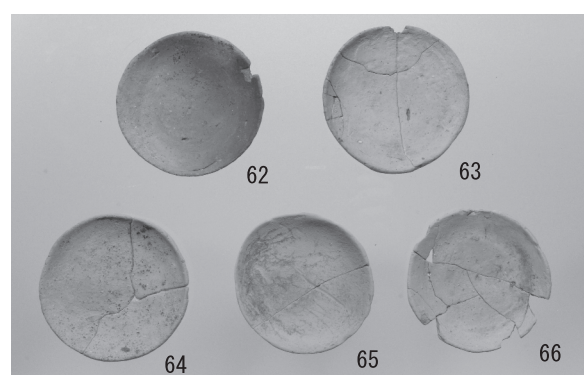
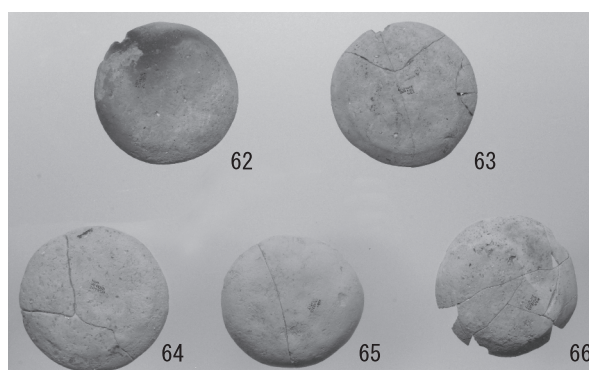
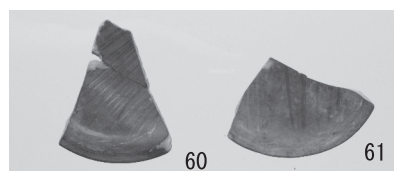
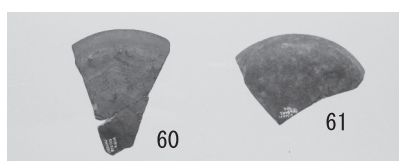
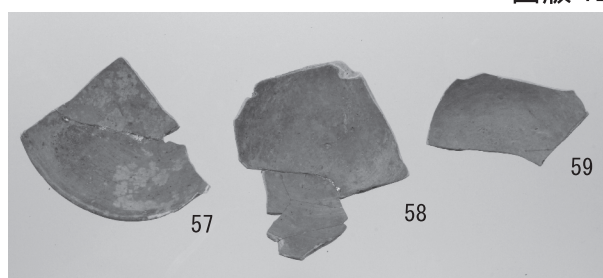
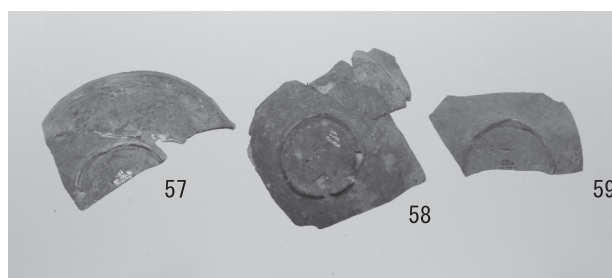
柱穴に残された柱根

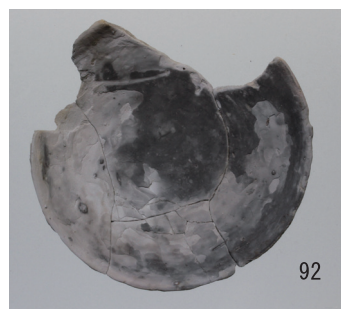
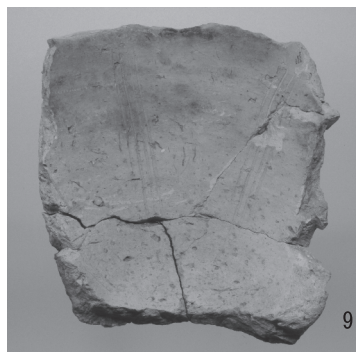
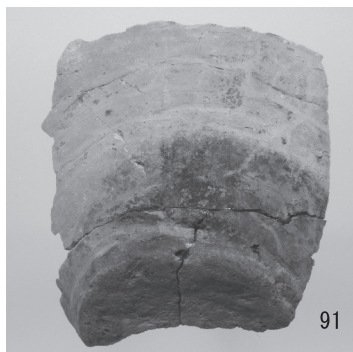
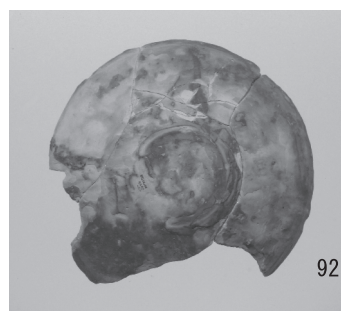
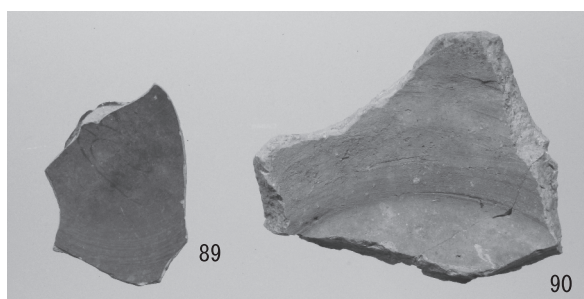
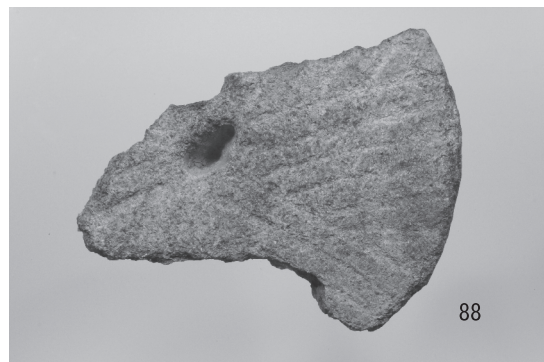
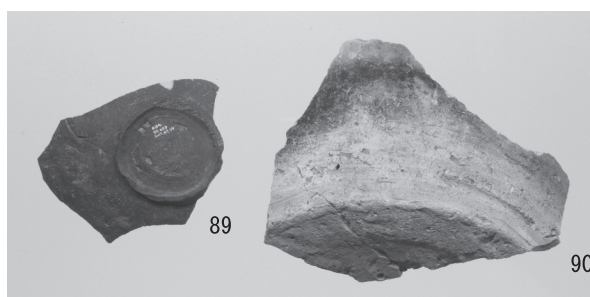
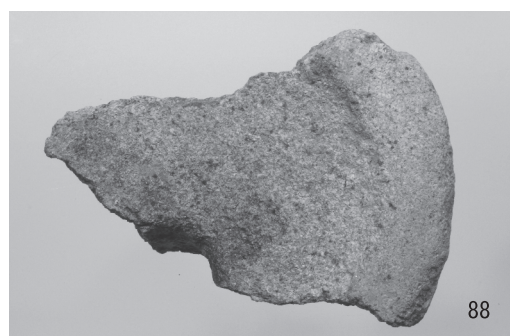
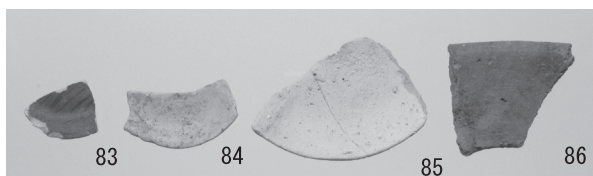
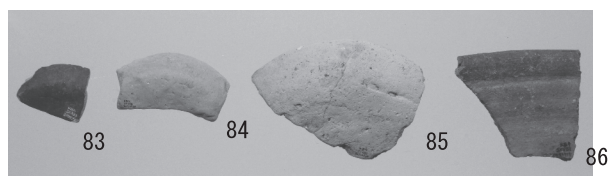
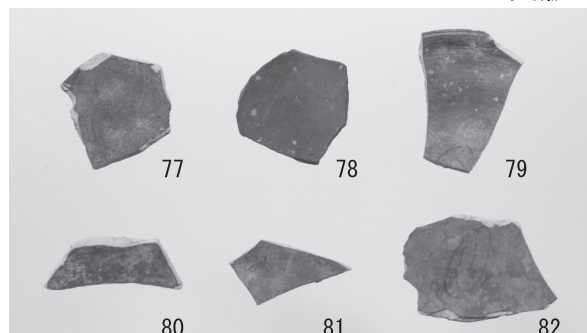
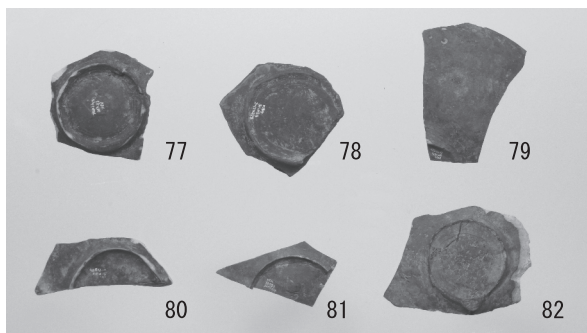


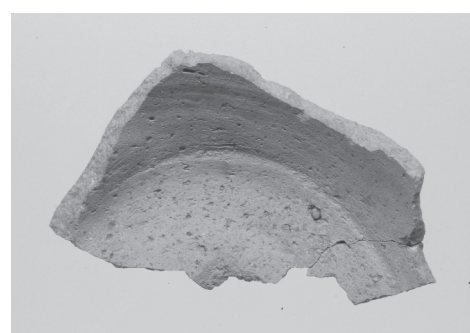
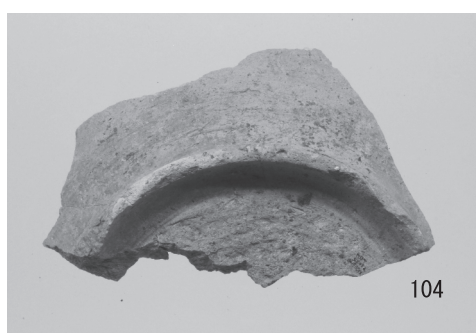
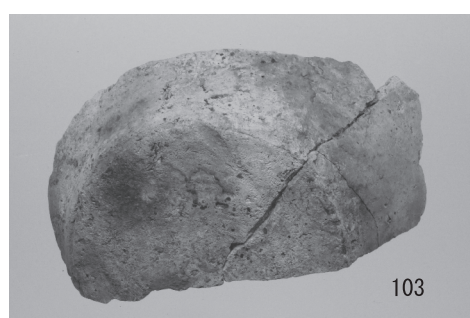
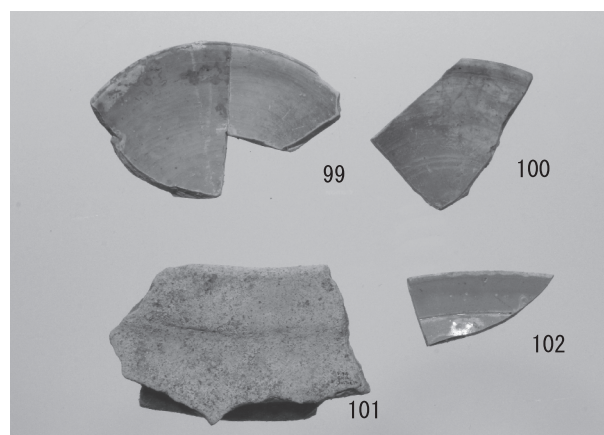
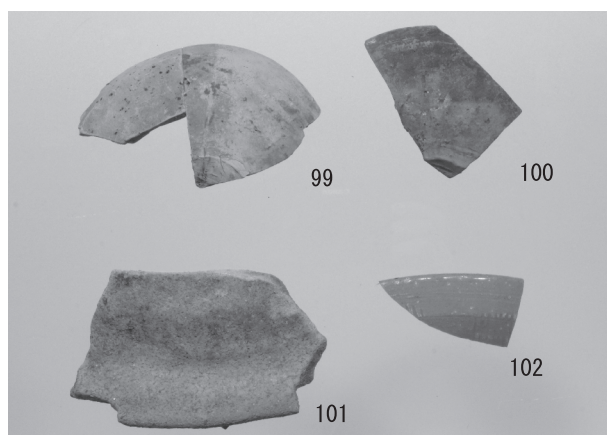
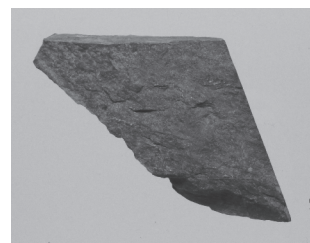
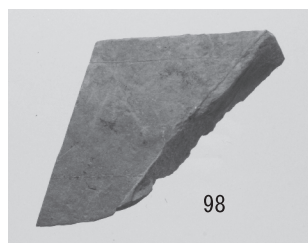
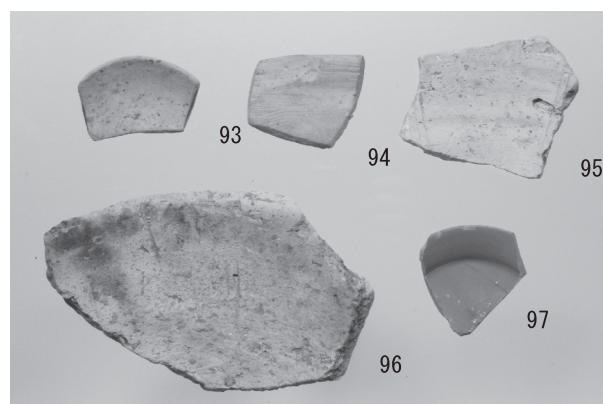
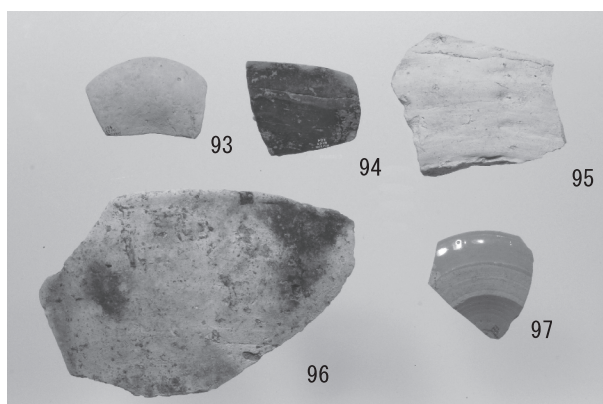


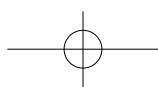
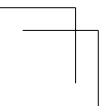
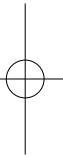
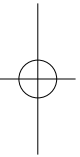
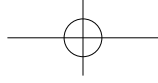
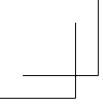












## 報告書抄録

ふりがな	きぶかわいせきだいよじはくつちょうさほうこくしょ							
書名	貴生川遺跡第4次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	甲賀市文化財報告書							
シリーズ番号	第32集							
編著者名	伊藤航貴							
編集機関	甲賀市教育委員会							
所在地	滋賀県甲賀市水口町水口							
発行年月日	平成30年(2018年)3月30日							
所収遺跡	所在地	コード		世界測地系		調査面積(m <sup>2</sup> )	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
きぶかわいせき 貴生川遺跡	甲賀市水口町貴生川	25209	363-139	34° 55' 32.4"	136° 10' 06.3"	741	2017. 5. 13~ 2017. 8. 30	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
きぶかわいせき 貴生川遺跡	集落	中世		溝、掘立柱建物		瓦器、土師器、陶器		

甲賀市文化財報告書第 32 集  
貴生川遺跡第 4 次発掘調査報告書

印刷・発行 2018年3月30日  
編集・発行 甲賀市教育委員会  
滋賀県甲賀市水口町水口6053番地  
TEL 0748-69-2251  
FAX 0748-69-2293  
印刷 株式会社トップ